city & life

都市のしくみとくらし

no. 127
Dec.–Mar. 2019–2020

特集

カフェとまちづくり
——心地よい空間と街並み

巻頭言

街のノードとしての「カフェ」

日本に「カフェ」のイメージが定着してきたのは1990年代後半。パリの街角をそのまま持ち込んだような、オープンテラスをもつ「オー・バカナル」や「ドゥ・マゴ」の出店が契機となっている。さらに「スターバックス」に代表されるシアトル系カフェ、主にワンプレートで供される食事「カフェめし」の流行を生んだ「東京カフェ」など、そのあり方は細分化されていく。

そんななか、「コミュニティカフェ」という存在が目立つようになってきたのが2000年頃。「人と人とを結ぶ地域社会の場や居場所の総称」として、主にまちづくりや福祉の取り組みのなかで広がっていく。また最近では、「哲学カフェ」や「サイエンスカフェ」など、対話や討論の場を「カフェ」という言葉で総称するようにもなっている。そもそも「カフェ」は、都市社会学でいう「サードプレイス」の一つとされ、人々の交流を促し、情報の収集・発信をし、地域の拠点となり得る可能性をもっている。

しかし、その機能だけがあればいいのだろうか。誰もが、いつでも、ふらっと立ち寄りたくなる魅力的な場であるためには、そこで供される飲食の質、空間デザイン、さらに店主／担い手のスキルやセンスも欠くことはできない要素だろう。

そこで今回は、カフェのソフト面としての機能に加え、建築やデザインなどのハード面にも焦点をあて、街のノード（結節点）として、人々の交流を促し、まちづくりに貢献できるカフェのあり方を考える。

（編集部）

表紙・裏表紙――「喫茶ランドリー」（関連記事：p2）
photo：坂本政十賜

特集　カフェとまちづくり――心地よい空間と街並み

contents

鼎談 なぜ、街には「カフェ」が必要なのか　2
塚本由晴×田中元子×大村謙二郎

ケーススタディ 日常に溶け込む、心地よい空間　10
サードプレイスとしてのカフェ
子育て支援を軸に、地域の「縁（えにし）」を結ぶ **cafe+1**（カフェ・プラスワン）
高校生をひいきする町のサードプレイス **コミュニティカフェEMANON**（エマノン）
不動産会社が経営する、人と街をつなぐ拠点
コマエカフェ／コマエカフェ不動産

ルポ カフェから始まるまちづくり 東京・国分寺　20

インタビュー 「出会いの場」としてのカフェ 飯田美樹　27

連載 Let's Greening!　緑のまちづくり⑤　30
輪島の朝市横蝶～蝶々とあそぶ、みんなの庭をつくろう

連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く⑱ ちいさいおうち小石川　32
「まち全体を園庭に」地域とつながる保育園

連載 噂の「駅前」探検⑤ 大宮駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜　34

back number・information　38

鼎談

なぜ、街には「カフェ」が必要なのか

喫茶スペースとランドリー、アイロン、ミシンなどを備えた「まちの家事室」が融合した「喫茶ランドリー」。隅田川の東側にある築55年の手袋の梱包工場だったビルの1階をリノベーションした空間は、0歳から高齢者までが集まる私設公民館のような場所として親しまれているという。今回はこの「喫茶ランドリー」に集まり、喫茶店好きを自認する都市計画の専門家である大村謙二郎氏を聞き手として、地域の拠点となる建築空間に詳しい建築家の塚本由晴氏と、「喫茶ランドリー」を運営するグランドレベルの田中元子氏による鼎談を実施。今街に求められているカフェ像を探った。

構成：**村田保子** photo：**坂本政十賜**

塚本由晴
建築家／東京工業大学大学院教授

×

田中元子
グランドレベル代表取締役社長／「喫茶ランドリー」オーナー

×

聞き手
大村謙二郎
筑波大学名誉教授／本誌企画委員

敷居の低さをデザインした、「喫茶ランドリー」とは？

大村――最初に田中さんに「喫茶ランドリー」をつくった経緯をお聞きできればと思います。

田中――私は以前から、建物の1階や広場などを人の居場所として活用し、地域を活性化することに取り組んでいるのですが、このビルを取得したオーナーから、リノベーションをして事業を運営する形で、地域に貢献できることをやりたいと、相談を受けたことが始まりでした。そこで2016年頃にコペンハーゲンで訪れたランドリーカフェをヒントに企画を提案しました。当初は自分で運営するつもりはなく事業者を探していたのですが、「マンションに囲まれている場所で商売はできない」という反応で、自分でやることになったのです。

大村――ランドリーカフェに着目したのは、どうしてですか？

田中――参考にしたのは「ランドロマットカフェ」というカフェです。ランドリーカフェというと洗濯機が並び、おまけでコーヒースタンドがあるイメージなのですが、そこは隅の方に洗濯機があるだけでした。でも老若男女が行き交う場所になっていて、洗濯機を一つ置くだけでアクティビティのきっかけになるということが印象に残っていました。昔から公民館や公園など「公」のつくものをやってみたいという思いがあり、「喫茶ランドリー」で私設公民館をつくることにトライするというモチベーションで始めたのです。公民館であるからには、さまざまな目的で、さまざまな人が自分のしたいことをできる環境にしたいのですが、そのために建築やデザインはとても重要だと考えました。コミュニティカフェは思いがあれば成功するものではなく、思いが形に具現化されないと、人の行動や心理には響きません。建築としては親しみやすく、「ここだったら何かできそう」という敷居の低さを感じてもらい、いろんな人の思いが具現化されることを大事にしました。

大村――お客さんは田中さんが想定したような使い方をしていますか？

田中――うちは喫茶店に加え、レンタルスペースとしても収益があり、自分の道具として空間を使いたいというニーズは高いと感じています。日々お客さまから持ち込まれる使い方やアイデアには驚かされますね。私はここをオープンする時から、自分が想定し得ない使い方をお客さまが持ってきてくれることを目指しており、それは予想以上の速さで実現しました。オープン後半年で、持ち込みのアクティビティやイベントが100件以上になったのです。

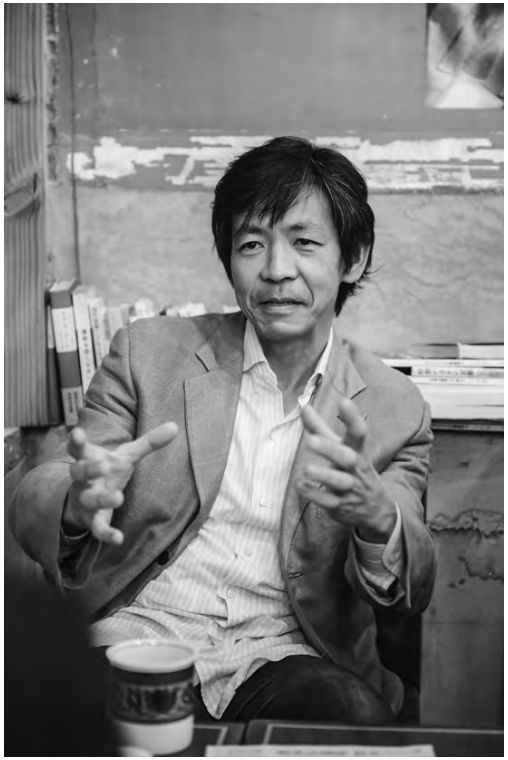
大村――「カフェ」ではなく「喫茶」を名乗る意味合い、特別な思い入れなどはあったのでしょうか？

田中――「喫茶」と名が付くところはタバコを吸うとか、少しだらしないことも許してくれる。カフェはノートパソコンはOKでも、トランプや編みものはNGという雰囲気があります。また「喫茶」にはマスターがいて、何度も行くと常連として認めてくれることが多いと思うのですが、カフェではその関係性がつくられにくいと感じていました。「喫茶」には、たとえば「実家」のような、許容が広い場所というイメージがあり、そこにはこだわりがあります。最初は昭和の喫茶店を模したものにしようと思っていたのですが、自分がつくりたいのは、居心地がよくて、人との関係性が自然に生まれるような空間です。イスは低いものにして、テーブルは小さいものを選びんだのはそのためです。なぜ喫茶店がだらしなさを許せる空間なのか、おそらくスケールにヒントがあると思っています。

スキルを持ち寄る場としてのカフェの有効性

大村――塚本さんは建築家として、喫茶店やカフェに対してどのような思いをお持ちになっていますか？

塚本――私は1980年代後半にパリに留学していたのですが、パリのカフェは日本の喫茶店とは方向性が違うことに驚きました。当時の日本の喫茶店は、雑居ビルの地下や2階にあり、暗い階段を進んで奥まで潜っていく雰囲気だったのに対し、パリのカフェは、道路にはみ出ていて、席に座っている人と道を歩いている人が挨拶を交わすような開かれた雰囲気でした。それには憧れましたね。東京にも90年代の半ばから、オープンカフェができ始めるのですが、ものすごくうるさい場所にオープン席があるようなちぐはぐな例もありました。オープンにすることが目



塚本由晴
つかもと・よしはる―1965年神奈川生まれ。建築家。工学博士。アトリエ・ワン共同代表。東京工業大学大学院教授。共著書に『図解2 アトリエ・ワン』（TOTO出版、2014）、『アトリエ・ワン コモナリティーズ　ふるまいの生産』（LIXIL出版、2014）他。

的化されているような、つまり記号としてのオープンカフェですね。都市のアコースティックという点では、ヨーロッパの方が周辺の音なども考えられたなかにカフェがある。建築と都市が人の動きなども含みながらつながって、街に賑やかさが出てくる。そういうのが密接に感じられる場所がカフェだと考えています。だからカフェで飲んでから演劇や映画、コンサートなどに行き、終演後もまたカフェやレストランに行く。公演の前後に立ち寄るカフェやレストランを含めて一つの夜のイベントになるのです。日本の場合、劇場が公園にあったりしますから、外に出ると周囲は暗く、立ち寄れるカフェがないこともあります。劇場、カフェ、レストランが施設として分断されていて、連続した都市の振る舞いとして位置付けられていない。その辺りに日本の都市の未熟さがあると思います。

大村――私は1947年生まれの団塊の世代で、60年代後半から70年代前半に大学生活を送りました。当時は大学が騒然としていて、友人たちとの待ち合わせの場所はたいてい喫茶店でした。朝と昼を兼ねてモーニングサービスで食事を済ませ、新聞や週刊誌が豊富にあるから午前中はそこで過ごして、同じようにやってきた仲間と情報交換をするような、溜まり場的な場所だったのです。こういった昭和の喫茶店というのは、今はほとんど残っておらず、現状は喫茶店の倒産が最多に迫るペースだといわれています。チェーン店型のカフェが増える一方で、「喫茶ランドリー」のような新しい形のカフェやコミュニティカフェなども増えていますが、ただ表層を真似るだけでは上手くいかないという側面もあります。そういった都市やコミュニティの視点から、カフェに期待されることやカフェのあり方についてはどう思われますか？

田中――「喫茶ランドリー」は、人が行き交うためのきっかけとして洗濯機を置いています。コーヒーを飲みたい人だけでなく、洗濯をする人も来るし、他の目的がある人も来るというのが大事。洗濯機は「あなたも来ていい場所だよ」というのを一目でアピールするための装置です。書店や生花店は、おじいさんでも小学生でも入っていい場所ですよね。カフェもメニューや店の雰囲気でそうなると思っています。塚本さんから、オープンカフェが目的化しているというお話がありましたが、建築や都市のことを考える時にその視点は大事だと思います。何を目的にするかで、同じことをやっても状況は変わってきますから。私は人生を豊かにする手段として、都市や建築のことを考えているので、オープンカフェをつくるにしても目的化するのではなく、こういう社会をつくるという願いや思いがないといけないと思っています。デッドスペースがあるからベンチを置いてコミュニティスペースをつくろうと言う人がいますが、デッドスペースがそのままコミュニティスペースになるわけではない。これから日本はもっと人の振る舞いに対して、繊細に考えていかなければと感じています。

塚本――「喫茶ランドリー」のように、ちょっとコーヒーが飲める場所は、マグネットのようにそこに集まる人たちのスキルを束ねて「スキル持ち寄りセンター」みたいになっていますよね。今はサービスを受けるだけでなく、当事者になりたいという感覚がすごくあると思う。今の社会は、あなたはお客さまでいいから、とにかくお金だけ払ってくれれば最高のサービスを差し上げますといった風に、人々を当事者性から遠ざけるようになっていますが、人々はそのことに反抗心をもっていて、むしろ自分のスキルを他の人のために使って役に立ちたい、交換したいと考えていると思います。それを実現する場として、あまり多くの決め事がないカフェはすごく有効。ロケーションや地域の性質などに合わせていかようにも変われるカフェという場所に期待があります。

田中元子
たなか・もとこ―1975年茨城生まれ。グランドレベル代表取締役社長。独学で建築を学び、2004年、大西正紀と共に、クリエイティブ・ユニットmosakiを共同設立。2010年より「けんちく体操」を広める建築啓蒙活動を開始。2016年グランドレベルを設立。2018年「喫茶ランドリー」をオープン。

メンバーシップの変更を起こす、他者を受け入れる空間づくり

田中――「喫茶ランドリー」にも、別々にミシンを使いにくる2人のご婦人がいるのですが、日時を決めてミシンの前で待ち合わせをして、クラフトワークを楽しんでいらっしゃるんですよ。彼女たちの作品を飾っていたら、まったく関係ないお客さまがうちに飾りたいからと発注をしてくれて、こんなことが起こるんだなと驚いています。

塚本――たとえば、図書館がどういうふうに回っているかは、何となくわかります。自分たちで本を持ち寄れば私設図書館ができるし、パンを焼くのが

大村謙二郎
おおむら・けんじろう―1947年兵庫県生まれ。工学博士。都市計画史、都市住宅政策。筑波大学名誉教授。共著書に『建築法規概論　改訂版　First Stageシリーズ』（実教出版2019）『土地はだれのものか　人口減少時代に問う』（白揚社、2019）他。

得意な人がいれば、パン屋だってできないことはない。100％じゃなくても、週に2回くらいでも十分楽しめて、いろいろなことができる。何か社会に参加していくということが、自分の能動性のなかから出てくると長続きするかもしれない。

田中――今まではパンを焼いていても、絵を描いていても、「プロになるのか」「店を持つのか」となってしまい、半端なことを社会が許してくれなかったと思います。日本では、皆もう雛鳥になっていて、「もっとサービス、モノ、情報をくれ」と口を開けて待っているだけになってしまった気がします。私はそんな雛鳥は量産したくないんです。「喫茶ランドリー」のある森下・両国エリアは、日本橋や銀座などにも近く、自転車でも行ける距離です。近隣エリアに住んでいる人を相手に、おしゃれで美味しいとアピールしても響かないと思っていたから、もっと安く、もっと美味しくという勝負からは降りました。お客さまに価値を見出してもらい、自分が思うような使い方ができるという喜びが価値になるようにしたかった。そのための工夫はいろいろしました。

塚本――「喫茶ランドリー」ではメンバーシップの種類の変更が起こっています。手袋の梱包をする工場だったときには、同じ職場で働く人の固定されたメンバーシップに合った建物でしたが、それをどう活かしていくのかという方策は、メンバーシップの別のあり方としてでデザインされているのが面白いと思います。閉じたメンバーシップの思いだけでつくらた空間には、田中さんのような外の視点が入っていないから、かっこ悪くてもそのままになってしまう。メンバーシップが完全に開いても閉じてもいない雰囲気は、インテリアや窓のつくり方に秘訣があると思います。ランドリーにはお茶を飲むだけではない人が来たり、いろいろな高さにある窓はより開かれた印象を与えています。そうやって、お店を始めた人たち以外の他者をいかに受け入れるかを考えることが欠かせません。格好良くし過ぎると、気取った人が集まって、スキルを持ち寄りにくくなる。微妙なチューニングが必要ですが、田中さんはそれをなさっているのだと思います。

大村――1920年代のドイツでつくられていた「ジードルング」や「カール・マルクス・ホーフ」のような公共住宅には、共同の洗濯場や保育園などがあり、居住者たちが寄り集まって助け合う互助的な組織をつくり、そのなかから新しい運動が起きた歴史がありました。また、60年代末くらいの日本の大学周辺の喫茶店は、そこに集まっている仲間で活発な議論があり、メンバーシップの交流が生まれていたと思います。チェーン店型のカフェでは、ノートパソコンだけを持ち込んで作業し、隣の人との会話は存在しない。リアルな場に来ているのだったら、リアルな形での交流があるといいなと感じます。

田中――「喫茶ランドリー」ではどっちもいいと思える環境にしたかったんです。ここをつくる時に先ほどの「ランドロマットカフェ」と、もう一つ参考にしたのが「おふろcafé utatane」（さいたま市）という店。そこは健康ランドをリノベーションしておしゃれっぽくした店ですが、若い人たちはお風呂に浸からず、ラウンジと呼ばれる暖炉を囲んだソファのような場所でSNSをやったりマンガを読んだりしている。お風呂ではなく居心地を買いにきていることが、すごく次世代的だと感じたんです。私はその時に喫茶やカフェを少し理解できるようになったと思います。本当は何かしに来たり誰かに会いにきたりしているけれど、コーヒーという口実がなくてはならない。私設公民館をつくっても人は来なかったと思いますが、喫茶という口実を付けたことで、実態は私設公民館だとわかっても、気に入った人は来てくれているのです。建築的な居心地というのは大事だし、これからもっと考えなければいけないことですが、建築だけではなくデザインの世界全体で、今までは洗練させることが善だとされてきました。でも、相手や目的によってデザインの何を善とするかは変わると思います。コミュニティがあることも善とされているのですが、コミュニティは内と外をつくってしまうのでちょっと警戒する必要があります。外の世界がどうなっているのかを常に考えていないといけないと思う。いろんなツマミを少しずつ動かしてチューニングしていくことが、デザインでも他の概念でも必要になっていると思います。

今後の日本で求められるのは、一人ひとりの存在価値を見出す場

大村――東京でもパリでも、カフェ文化は都市文化と深く結び付いていると思いますが、私が勤務していた筑波大学は研究学園都市で、カフェ文化が自然発生的に起こるような場所ではなかったですね。でも、大学の近くにはカフェがあり、学生たちはよく利用していました。そもそも私が学生の頃から大学の近くには喫茶店がたくさんありましたし、カフェ文化を担うのは若い層という面もあると思います。この点についてはどう考えますか？

田中――若い人たちと話していると、田舎の子も都会の子も居場所がないと言います。それは町に機能しかないからだと思う。彼らが言う居場所とは、服を買いなさい、コーヒーを飲みなさいと決められた場所ではなく、いろいろな状態の自分を受け入れ、許容してくれる居心地のことだと思います。若者は町に機能を求めておらず、自分をレスポンスできる店や場がないから、彼らは行き場に困っているのです。近

い将来、私たちはこれまで払ったことがないサービスに対価を払う時代になると思います。そのうちに新しい商売が始まって、都市と密接な関係が生まれてくるのではないでしょうか。若い人たちについても、大人から見るとモノを買わないとか、お金を必要としていないとか見えるかもしれませんが、いろいろ渇望していると思います。渇望するものが今までなかったものだから難しいのではないでしょうか。

大村――先ほどのスキルの持ち寄りをする場や、何が欲しいのかを発見し合う場を渇望しているのでしょうか？

田中――スキルの持ち寄りとは存在価値の持ち寄りだと思います。今後、人口が減って、ただ人がいてくれるだけで大歓迎という社会になっていくような気がしますし、今まで考えたこともないようなビジネスが生まれてくる可能性もありますね。

塚本――スキルを強調すると、スキルがないと参加できないのかとなってしまうのですが、そんなことはありません。スキルがなくても人は食べることができます。それは人間が生きるうえで最後まで残るスキルの一つでもあり、食べて「美味しい」という言葉を返せば、つくった人を喜ばせることができる。街角に「喫茶ランドリー」のようなカフェが増えて、デイケア施設が少なくなればいいですよね。シンガポールにホウカーセンターという、もとは路上の屋台だった店を集めてフードコートにした場所がいたるところにありますが、そこでは年配の男性が朝から飲んでいて、そこにお母さんが子どもを連れてきて、お昼を食べている。年配の男性は子どもにかまって、楽しそうにしています。そういう場所が東京にもあるといいなと思います。

大村――ドイツの居酒屋のような場所では常連席があって、常連たちが昼間から来て、ビールを飲みながらカードをやるような空間があります。それぞれの国の文化によって、居心地の良さを見出せる空間があり、それが許容できる経済システムがあることはすごく大切ですね。馴染みの空間があって、約束をしなくてもそこに行けば誰かに会えて、ほっとできる。そういうカフェがあって欲しいと思うし、そういう生態系ができてくればすごく魅力のある都市のあり方ができてくると思います。

喫茶ランドリー

両国・森下エリアに2018年1月にオープン。
約100㎡の店内には、喫茶スペースとランドリー、
アイロン、ミシンを備えた「まちの家事室」が融合。
喫茶スペースでは、コーヒー、紅茶、クラフトビール、
カレー、軽食、ケーキなどが楽しめる。
イベントや撮影などのレンタルスペースとしても人気があり、
さまざまな集いに活用されている。

東京都墨田区千歳2-6-9 イマケンビル1階
営業時間：10:00～20:00（貸切、休業の場合もあり）https://kissalaundry.com

●「喫茶ランドリー」には四つのスペースがあり、写真の「モグラ席」は半地下でこもり感がある。既存の床レベルをそのまま活かし、目線の高さや居心地の異なる空間を生み出した。大きく開いた窓には木枠を設け、温かみのある雰囲気に。一部の壁・天井はコンクリートの躯体をそのまま活かしている

●通りに面した窓には、すべての人を歓迎するメッセージ。子ども連れのママ友も気軽に集まれる場所になっている。なかには刺身やてんぷらを持ち込んで楽しむ常連さんもいるという

●取材当日は「まちの家事室」で学習塾が開催されていた。常連さんからやってみたいという声があり、近所の子どもたちに声をかけて実現。子どもたちは勉強が終わると近くの公園で遊んだり、店内でくつろいだり、友だちの家のように自由に過ごしていた

●ガラスの建具の向こうは「まちの家事室」。業務用の洗濯機・乾燥機が並ぶ様子が、通りからも見えるようになっている。ミシンやアイロンなどもあり、実家のような親しみを感じるスペースになっている

●通りに面して大きく開いた間口。過ごしやすい季節はフルオープンにして、より入りやすい雰囲気をつくっている。軒先にもベンチやテーブルがあり、自然に人が集まる空間となっている

ケーススタディ

日常に溶け込む、心地よい空間

サードプレイスとしてのカフェ

「この町に、このカフェがある」。そのことが地域にどのような影響を与えているのか。カフェのある町並み、カフェの佇まいとその空間、提供される飲食、運営手法と状況などを調べ、サードプレイスとしてのカフェのあり方を考える。

取材・文:**杉山衛** photo:**新井卓**

1 子育て支援を軸に、地域の「縁(えにし)」を結ぶ

cafe+1(カフェ・プラスワン)

●茨城県常陸太田市東一町2288(https://yui-1.com/cafe/) ●営業時間:11:00〜16:00、日・月・火曜日定休

「よそ」から来た8人の女性が開いたコミュニティカフェが、もう10年以上も続いていると聞いて、茨城県常陸太田市にある鯨ヶ丘商店街を訪れた。

この鯨ヶ丘商店街は、高さ約30m、東西約500m、南北約1.5kmと、南北に細長い台地の上に乗った不思議な商店街だ。海から約10km内陸にあり、古くから塩の集積地として栄えたこの台地には、平安時代に太田城が築かれ、城下町としても賑わった。下って江戸時代には、米や物資が行き交った棚倉街道の宿場町、明治以降には県の北部で生産されるタバコや紙の集積地ともなり、その繁栄は戦後まで続いたという。西通り(棚倉街道)と東通りの二つの通りからなるわずか数百メートルのこの商店街に、江戸時代から明治、大正、昭和初期にわたる歴史的建造物が多く残されているのはこのためで、往時の繁栄が偲ばれる。

水戸と郡山をつなぐJR水郡線から分かれた支線(常陸太田支線)の終点、常陸太田駅から北へクルマで約3分。大きなカーブを描く東坂を登りきると、ひなびた商店街が忽然と現れ、来訪者を驚かせる。コミュニティカフェ「cafe+1(カフェ・プラスワン)」は、この東坂を登りきった東通りに面し、商店街のなかでも比較的多くの店舗が並ぶ場所に位置している。カフェの立ち上げのリーダーで、現在はこのカフェを運営するNPO法人「結」の理事長を務める塩原慶子さんは、今から30年ほど前、「よそ」の町からこの鯨ヶ丘のある常陸太田市内へと嫁いできたのだという。

●クジラをあしらった「cafe+1」のマーク

上●店先ではさまざまな情報が発信されている
右●鯨ヶ丘商店街の東通りに面した「cafe+1」のエントランス

左上●お昼時の店内。台風19号による豪雨被害の影響でお客さんは少ない方だという
右上●奥のお座敷には女子高生が集い談笑していた
左下●ほとんど改修の手を入れなかったという2階のフロア
右下●店内の小物の一つひとつにも「想い」が宿り物語が紡ぎ出される

自分たちの経験から、今の子育てを支援したい

「知らない土地へ嫁いでくると、知り合いもいないし、美容院はどこがいい? 歯医者はどこ? という身近な情報がまったくないんですね。そのうち子育てが始まると、もうごちゃごちゃにもがくような日々で……。そんな時、信頼できる人が教えてくれた情報は、とてもありがたかった」と、塩原さんは「ここ」にきた当初を振り返る。

当時は、高度成長期にできた全国組織の子育てサークルが各地に支部をもち、塩原さんも子育て中は隣接する日立市の支部に通い、その後、地元常陸太田での支部設立に至る。サークルでは、演劇や音楽会を中心としたプログラムが組まれていて、子どもにはライブ感のあるいい経験となり、母親には息抜きやネットワークを広げる良い機会ではあったが、1年先、2年先のプログラムまで決まっていて、融通の利かない窮屈さも感じていたという。

それから約10年。自分たちの子育てが終わった頃、「現在子育てをしている若いお母さんたちにも、情報やつながりが必要なのでは?」と考えるようになった塩原さんたちは、親の介護が始まるまでの手が空いている間に、何かできないかと考え始める。それが、このコミュニティカフェ「cafe+1」のスタートとなった。

ちょうどその頃鯨ヶ丘商店街では、県からの助成金を得て、3軒の空き店舗を利用して新店舗をオープンさせる計画がもちあがっていた。塩原さんは、以前から子育てサークルの活動を通して面識のあった商店会会長の渡辺彰さんから、背中を押されるようにしてカフェのオープンを決めた。

●cafe+1を立ち上げ、特定非営利活動法人「結」の理事長を務める塩原慶子さん

「お店も、改装費の助成もあって、私たちにもやりたい気持ちと時間がありましたから、これが〈縁〉なんでしょうね。2007年の9月にその話を聞き、翌年の3月にはもうオープンでしたから、2段跳び、3段跳びで駆け上がった感じです」と、塩原さんは笑う。

知り合いを増やすためのカフェ

塩原さんたちが3軒の候補から選んだのは、最初に勧められた、近くに駐車場があって厨房施設も完備された店ではなく、築約80年の、家具屋を営んでいたという古民家だった。カフェの設立に集まったのは子育て時代からつながってきた、いずれも「よそ」から移住してきた女性8人。そのなかには建築士もいて、彼女がここを推し、できる限り余計な手を入れない方針で改装を手がけたという。

メンバーには他にも、大学で幼稚園や保育園の先生を育てる先生、有機野菜農家、結婚を機にケーキ屋さんを退職した人など、さまざまなスキルをも

つ人がいた。最初は塩原さんの個人商店としてスタートした「cafe+1」では、それぞれの得意分野を生かしてカフェの運営を行うかたわら、主に2階のスペースを使って親子のクラフト教室や、遊びの会、市内のレストランのシェフによる料理教室など、さまざまな催しも開いてきた。こうしたソフト事業を始めるにあたっては、市民グループの「こんなことがしたい」という提案に対して助成金が交付される、市の「市民提案型まちづくり事業」も大きな後押しとなってくれた。

「カフェもイベントも、できるだけ地のものを使い、地元の人たちの協力をいただきながら運営してきました」と、塩原さん。古い木造のホッとした安らぎが感じられる店内には、メンバーの有機野菜農家から仕入れた野菜の他、常陸太田産の米、旬の地物を採り入れたメニューが用意され、メンバーによる手づくりのケーキも楽しむことができる。器にも地元の作家の作品を使うことで、常陸太田ならではの特色が出ると共に、地域の人とのネットワークも広がってきた。

「cafe+1」のこうした活動は次第に市にも認知され、さまざまな助成や委託事業の声がかかるようになる。そこで塩原さんは、2013年に改めてNPO法人「結」を立ち上げ、現在では、西通りにある「梅津会館・郷土資料館」や、鯨ヶ丘を西に下った公園にある子育て支援施設「じょうづるはうす」の指定管理などを任されている。

ハードからコミュニティへ、転換期を迎えた商店街

一方、「cafe+1」がある鯨ヶ丘商店街は、高度成長期を過ぎる頃から衰退の兆しが見え始め、商店会会長の渡辺さんが家業を継いだ1975年頃にピークを迎えていた売り上げは、その後徐々に落ちていった。丘の下にバイパス道路が走り、利便性が高まったことで、店舗や公共施設など町の機能が充実したことが大きな要因だった。1978年には現在の梅津会館に置かれていた市庁舎がふもとへ移転し、それと前後して商店街に二つあった中規模の地方デパートも次々と閉店・移転していったという。

渡辺さんは当時を振り返りつつ、「ちょうど塩原さんが子育てサークルのあり方に違和感を感じていた頃、僕たちもまちづくりに迷っていました。80年代にかけてはモール化やパティオの設置、公園の整備など、ハード的な事業でまちづくりを進めましたが、資金もないから規模が小さくなって、なかなか効果も上がりませんでした」と語る。

●東通りと西通りを結ぶ塩横町には歴史的建造物が並ぶ

90年代に入ってバブル経済が崩壊した頃、渡辺さんたちは地域社会の「目に見える変化」から「目に見えない変化」へ着目するようになる。目に見える変化は、前述したような町の機能がふもとの平地へ移転していったこと。目に見えない変化は、それによって人と人とをつなぐ「縁」が希薄になってきたことだ。地縁、血縁、職縁は簡単に自分で選んだり広げたりできないが、不特定多数の人たちがつながり合う「友縁」は選択可能で、求めればいくらでも広がりをもつことができる。「僕たちは〈コミュニティ〉の意味を〈私たち〉と捉えることで、丘の上の約4000人の住民だけではなく、ここを訪れ、愛着をもってくれるすべての人を対象にできると考えたのです」と、渡辺さんは言う。

1992年には鯨ヶ丘商店街に「夢見る会」という勉強会が立ち上げられ、これまでのハード主体のまちづくりから、人と人との「縁」をつなぐことに重点を置く、ソフト主体のまちづくりへと大きく舵が切られる。この会からは、たい焼きならぬくじら焼きを売る「くじら屋」や、子どもたちの社交場となる駄菓子屋「いも屋」といった商店会の直営店や、ギャラリー「考鯨庵」などが生まれてきた。

左●「結」が指定管理者となっている郷土資料館 梅津会館。かつては市庁舎として使われていた
中●鯨ヶ丘に登る七つの坂道の一つ「板谷坂」
右●商店会直営店「くじら屋」名物の「くじら焼き」

渡辺さんたち商店会のこうした考え方の転換が、塩原さんたちの想いとつながって、女性の縁をつなぐコミュニティカフェ「cafe+1」の誕生を後押ししたと言えるだろう。

お客さんにもスタッフにも「想い」を伝える

取材に訪れた日は、数日前の台風19号で近隣に水害が発生し、JR水郡線にも不通区間が生じていた。それでもお昼時の「cafe+1」はお客さんで賑わい、1日限定5食という伝統メニューの「わさびご飯」は、早々に売り切れてしまった。1日5食では少なくて競争率が高そうだが、そもそも営業日も週4日と少ない。しかし今はこれが精一杯だと、塩原さんは言う。

「cafe+1」をプラットフォームにNPOが運営する施設では、女性に社会とのつながりの場を用意したいとの想いから午前／午後でシフトを組み、10～13人ほどのチームで施設を運営している。子どもを幼稚園に送り出した午前中、親の介護施設や病院への送り迎えのない日など、細かく対応しながら勤務表をつくり、子どもの急な発熱などの不慮の出来事にも備える。

「たとえ少しでも、自分の働きで得る月々の収入はお母さんや主婦にとって大切なので、子育てや親の介護と両立できる方法を考えました。このチームがまたコミュニティとなってつながりを深めながら、知り合いに声がけしてイベントへの参加者を増やしたりと、情報の発信力も大きくしてくれるんです」と塩原さん。

「cafe+1」ができてからは、地元のお年寄りばかりだった商店街に子ども連れのお母さんたちの姿が見られるようになり、とくにここ数年は、「よそ」からの若い家族やカップル、地元の高校生も多く訪れるようになった。この日も女子高校生たちが「cafe+1」に寄り道していて、取材の撮影にも快く応じてくれた。

「ここへ来た時に、たまたまこんなふうにプロのカメラマンに写真をとってもらえた。そんな〈物語〉に出会えれば、それが〈友縁〉のきっかけとなります。この店の古民家の痕跡の一つひとつ、スタッフの一人ひとりも、みんな想いの詰まった物語なんですね。特別なイベントではなくて、日常でそういう人やコトと出会い、新しい物語が紡がれていくことが大事で、そういう場として〈cafe+1〉は、間違いなくこの商店街の優等生です」と渡辺さん。

渡辺さんは「cafe+1」を、家族を養うための「家業」とも、利潤を追求する「企業」とも違う、想いのある業態という意味で「想業」と呼んでいる。

地域に根付きながら地域に貢献する

「まぁ、道楽ですね」と塩原さん。女性が新しく地域社会に入る苦労は大きく、とくに歴史のある地域では祭礼の手順やしきたりなど、細かい決まり事も多い。「でも、地域は古臭いと切り捨てるのではなく、伝統は伝統として大切にしながら、別の場所で同じ価値観の人とつながっていれば、また元気に家庭に戻っていける。私にとって〈cafe+1〉は、避難場所でもありました。伝統も自分も、子どもたちの未来も両立させたい。他の地域から来て、〈よそ〉の視点も持ちながら〈ここ〉に住み続けている私たちだからこそできる、地域への貢献もあるのではないか、と考えています」。

●鯨ヶ丘商店会会長の渡辺彰さん。「結」の副理事長でもある

そう語る塩原さんの目下の課題は、「cafe+1」の存続だ。初期メンバーが高齢化し、親の介護が始まった頃、塩原さんはカフェ運営を人に任せて代替わりを試みたが、うまくいかなかったという。それでもせっかく立ち上げた「cafe+1」は、今後も続けるソフト事業のプラットフォームとして、ぜひ存続させたい。塩原さんたちは、今、その方法を模索中だ。

一方丘の下の平地には、全国チェーンの巨大なショッピングモールの出店も決まっているという。そこでは多くのお母さんたちがパートタイムで働き、また、子どもの遊び場や保育室が完備されたモールで買い物を楽しむこともできるだろう。しかしそこに、お母さんたちの助けになる「縁」が生まれるのか、塩原さんは心配する。そういう近い将来にも、この坂を登って多くの人に来てもらうためには、「cafe+1」が、人の「想い」をつなぎ「縁」を結ぶコミュニティの中心であることが、いっそう必要なのかもしれない。

2 高校生をひいきする町のサードプレイス

コミュニティカフェ EMANON（エマノン）

●福島県白河市本町9番地（https://emanon.fukushima.jp）●営業時間：12:00～20:30、水・木曜日定休（臨時休業・貸切あり）

名前のない、コミュニティカフェ

EMANON（エマノン）。No name（名前のない）を逆さに綴った、斬新で洒落た名前をもつコミュニティカフェには、ここを訪れる人たちに、この場所を自由に使って生かして欲しいという、オーナーである青砥和希さんの想いが込められている。それゆえ、あえてこの場所を規定するような名前はつけられていない。

「EMANON」が福島県白河市の中心市街地にオープンしたのは2016年3月。当時青砥さんは東京で暮らす大学院生だった。県内の矢祭町に生まれ育ち、高校時代は白河市内の高校に通った経験があるという青砥さんが、なぜカフェのオーナーになったのか。話は2011年の東日本大震災までさかのぼる。

青砥さんが大学1年目を終えようとしていた3月11日に起きた東日本大震災は、故郷・福島に大きな被害をもたらした。津波の被害や原発事故、それに伴う農業の風評被害など、多くの人たちのさまざまな議論が交わされるなか、自分たちにも何かできないかと県出身の大学生が集まったが、青砥さんはその時、大きな無力感に襲われたという。

「僕たちは福島のことを何も知らない、ということに驚かされました。地域で何かをした経験がほとんどない。だから被災した福島に対して、自分の言葉で語ることもできなかった」と、青砥さん。自身の高校時代の3年間を振り返っても、全国チェーンの古書店に通いつめた思い出しかなく、毎日白河に通ってはいても、放課後にはそれ以外に行くところも居場所もなかったという。

人口約6万人の白河市には、大学もなく、短大もない。つまり進学を希望する高校生は白河を出ることになり、高校時代がここで過ごす最後の3年間になる。にもかかわらず彼らの居場所がないことで、白河の場所の記憶や人の記憶が残らない。そうして多くの若い人たちが、故郷に戻る選択肢を考えることもなく白河を離れてしまう。

「家庭と学校、親と教員の固定化された関係しかなかったから、高校生の僕は、白河が息苦しくてキライでした。〈EMANON〉はそのどちらでもない、人と自由な関係を結べるサードプレイス（第3の場所）です。ここで白河の町や人とつながりながら、故郷の記憶が残る高校生活を過ごして欲しい」と、青砥さん。だから「EMANON」は、「高校生をひいきする店」であることを公言している。

期間限定のイベントから日常のサードプレイスへ

「地域の拠点となる場所をつくりたい」という思いから、東日本大震災翌年の2012年、青砥さんたち白河にゆかりのある大学生が集って始めたのが、夏休みの2週間を使って大学生と高校生が交流する「Shirakawa Week（白河ウィーク）」だ。チラシを配り、知り合いのつてをたどって参加者を募り、市の施設を会場として、町のフィールドワークや、大学の勉強や研究を体験するワークショップなどを開催した。

●旧奥州街道の古い町並みに建つ古民家を改装したコミュニティカフェ「EMANON」

●キッチンに立つスタッフ。中央がオーナーの青砥和希さん。青砥さんはEMANONなどを運営する一般社団法人未来の準備室の理事長を務める

白河は、古代から白河の関が置かれた東北への玄関口であり、江戸時代には奥州街道終点の宿場町として賑わった。東北の押さえとしての要衝で、現在のJR東北線・白河駅のすぐ北側にそびえる白河小峰城には、後に老中として寛政の改革に取り組んだ松平定信を始めとする有力者が、藩主として入城した。市街地を東西に貫く旧奥州街道（国道294号）を始め、旧道のところどころには、敵の侵入を遅らせるための「鉤型（かぎがた）」と呼ばれる屈折が今も残され、北の守りだったことを物語る。フィールドワークでは、そんな町の特色も改めて見えてきたという。

今も続くこの「Shirakawa Week」をきっかけに市との関係も深まり、市長を交えて開催した「白河の未来について語る」シンポジウムからも、期間限定ではない、恒常的な場所や活動を望む声が上がった。その声に後押しされるように青砥さんはコミュニティカフェを計画し、市からは、企画政策課が担当する「高校生の居場所をつくる」プロジェクトの委託事業として、運営費の一部が助成されることとなった。

「この話が立ち上がった2015年当時は、東京の一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけようとする〈地方創生〉の流れもありました。一方震災の応急的な復旧は終わって、見えてきた課題に長期的に取り組む復興が始まり、何か新しいことをやろうという機運に満ちていました。そんな時、市の後援を得たイベントが契機となり、〈EMANON〉が実現できました」と青砥さん。青砥さん自身も大学院生で比較的時間に余裕があったこともあり、市の担当者と共に、かつて旅館だったという旧奥州街道に面した築約90年の木造古民家の空き家を選び、改修の手を入れて、2016年のオープンにこぎつけた。

高校生と町と人をつなぐ「居場所」をつくる

「最初は何が生まれるかわからないので、なるべく縛りをつけないでやってみよう」と、「EMANON」では店の改修から高校生との共同作業を行った。福島の木材を使って内装や家具をデザインしたのは青砥さんと同期の、建築科の大学院生や家具デザインを学んだ友人だった。建て付けや金属加工は地元の業者に依頼したが、表面の磨きや塗装など、最後は高校生たちが自分の手で仕上げた、手づくりの空間となった。

木造の店内は、もとからあった神棚や間取りを残しながら広いフロアが取られ、シンプルで、学校の教室を思わせる。テーブルは、ノートを広げても十分な広さが確保されている。入口の土間には明るく開放的なキッチンが設えられ、城下町特有の間口が狭く細長い敷地の奥には、バーベキューにも使えるテラスと菜園もできる庭がある。かつてはかまどが置かれていたという小部屋のカウンター席や、2階の8畳2間ある和室など、くつろいだり活動したりと、いろいろに使えそうな空間が魅力的だ。「EMANON」では使用目的を確認したうえで、こうしたスペースや店舗全体を、レンタルスペースとして提供する、フレキシブルな対応ができるようになっている。

青砥さんは「EMANON」を舞台として、恒例となった季節の催事や食事会、ボードゲーム大会を始め、アーティストの作品発表やワークショップなど、さまざまなイベントを企画し、高校生を中心に地域の人たちを巻き込んできた。その一つ、高校生と大学生の混成による「裏庭編集部」が年1冊のスローペースで刊行するフリーペーパー『ヨリミチ』では、背伸びしない、高校生目線で発掘された「安く寄り道を楽しむ通学路」の記事がほほえましい。また、市内の学校に勤務する外国語指導助手（ALT）の外国人に声をかけて、

左●県産木材を使った温もりが感じられる店内。神棚には地域の名産品「白河だるま」が飾られている
中●レトロ感満載の8畳2間の2階部分。各種イベントの会場ともなっている
右●かつてはかまどが置かれていたというカウンター式の小部屋

左●細長い敷地の奥の通称「裏庭」。
フリーペーパー『ヨリミチ』編集部の名称は、ここから採られた
上●高校生目線の記事が楽しい、
年1回刊行のフリーペーパー『ヨリミチ』

金曜日の夜に交流の場をつくる「alt_cafe」では、ゆるやかな学習の機会も提供してきた。

居心地の良さ＋新しいこととの出会いの場

この取材の撮影を担当した写真家の新井卓さんは、ダゲレオタイプという撮影方法による自身の作品シリーズ「Imago／イマーゴー」の制作で、青砥さんの協力を得て、ここ「EMANON」に集う高校生たちの肖像を撮影した。この時は、県立美術館の学芸員を通して新井さんを紹介されたそうだが、青砥さんは常に「何か新しいこと」に対してアンテナを張り、ネットワークを広げることに努めている。

「高校生たちはシャイで、自分からはなかなか接触を求めません。ですから僕たちスタッフがうまく媒介してあげる必要がある。ただ、最近は高校生との年齢も離れ始め、ギャップが気になり始めました（笑）」と、青砥さん。そんなこともあって、スタッフにはできるだけ大学生に来てもらいたいと考えている。

もちろんいちばんの目的は、高校生にとって安心できる、居心地の良い場所であることだ。「EMANON」では高校生限定の会員証を発行し、提示があれば注文なしでもずっといられるよう配慮した。会員は4年間で延べ1400人。毎年卒業と新入があるので、その顔ぶれは少しずつ変わっていく。そのなかで常連を獲得していくのは、なかなか大変だ。しかし、高校生にとっていつも顔見知りがいる「馴染みの場所」であるだけではなく、時には思いもよらない新しい人やコトにも出会える場所、その二つがセットになっていることが大切だと、青砥さんは考えている。

オープン4年目を迎え、「Shirakawa Week」からつながりのある高校生たちは、卒業して各地の大学へと進学した。「彼らには、休みに帰郷するだけじゃなく、その時必ず友だちを連れておいで、と話しています。でも、大学生には来てもらいたいのに、来てもらっても泊まるところがない。実家に泊まってもらうのも限界がありますし……」。今青砥さんは、そうした人たちの受け皿となるように、クラウドファンディングを活用して、駅前にゲストハウスをつくり始めている。

こうした活動を維持するためにも、カフェの経営的な安定は重要だと考える青砥さんは、高校生の客が少ないお昼時を利用したコーヒーワークショップやママのためのランチタイムなど、新しいイベントも始めている。また最近では、近所の豆腐屋さんとスイーツを共同開発し、カフェの新メニューとして加わった。こうした試みも、また地域のネットワークを広げることにつながり、「EMANON」は、この町の風景にすっかりなじみ始めている。

●新メニュー「ソイタピオカミルクティー」を共同開発したあづま豆腐店のご主人

上●旧奥州街道の古い町並み。突き当たりのように見えるのは、大きく鉤形に曲がっているため。かつてそこは「十軒店（じゅけんだな）」と呼ばれていた
右●白河のシンボル「白河小峰城」。東北の石垣造り三名城の一つに数えられる石垣は東日本大震災で崩落し、8年をかけてようやく復旧したばかりだ

3 不動産会社が経営する、人と街をつなぐ拠点

コマエカフェ／コマエカフェ不動産

●東京都狛江市中和泉1-2-1（http://www.komaecafe.com）●営業時間：9：00～18：00、水曜日定休

東京都狛江市。羽田空港の半分以下の広さ（6.39㎢）で、日本で2番目に小さな市といわれるこの町は、毎月80人ペースで人口が増え続けている、知る人ぞ知る人気のエリアだ。とくにここ数年は、市内に多く残っていた工場の跡地に大きなマンションが建ち並び、30代から40代の子育て世代が多く住む町になってきている。

都心からのアクセスが良いのも人気の理由だろう。市内には新宿と小田原をつなぐ小田急線が走り、世田谷区の高級住宅街として知られる成城学園前駅の2駅隣の狛江駅と、多摩川を渡って神奈川県に入る手前の和泉多摩川駅の、二つの駅がある。狛江駅から都心の新宿には急行に乗り換えて20分、各駅停車でも30分と便利が良い。

「コマエカフェ（komae cafe）」は、狛江駅から北へ歩いて4分ほど、駅周辺の商店街が途切れ、その先に高層マンション群を望む、商業区と居住区のちょうど境目の交差点の角に位置している。白と水色のパステルカラーと白木を基調とした北欧風の、ふらりと立ち寄ってみたくなるような気軽な店構えだ。時刻はちょうどお昼時で、駐輪場にはチャイルドシートを付けた電動アシスト自転車がずらりと並ぶ。さほど広くない店内は子ども連れのお母さんたちで賑わい、2階のフロアからも子どもたちの賑やかな声が聞こえる。

この居心地の良さそうなカフェが、じつは不動産会社でもある、というから驚きだ。

子育て中のお母さんに居心地の良い場所

オーナーの小川英明さんは、大手の不動産会社に勤務した経験をもち、宅地建物取引士の資格をもつ。小川さん自身は横浜の出身だが、狛江には奥さんの実家があり、結婚を機に8年ほど前に転入した。その後独立して狛江を拠点に不動産業を始めようと考え、改めて「わが町」を観察してみると、子育てに奮闘する若いお母さんたちの姿が目に止まったという。

「全国的には少子化が進んでいますが、狛江には子育て世代が多いと感じましたし、市の統計でも数値として表れています。それなのに若いお母さんたちが、子ども連れで気軽にご飯を食べられる場所がない。全国チェーンのファミレスもいいけれど、狛江ならではの場所が必要だと感じました」と小川さん。まずは、お母さんたちのためのカフェをつくろうと考えたが、不動産業界出身の小川さんにはカフェ経営のノウハウがない。そこでカフェ経験者を含めてスタッフを募り、出店の話を進めているちょうどその時に、タイミングよく現在の店舗となった物件が貸しに出され、話が一挙に具体化した

●コマエカフェ／コマエカフェ不動産を経営する株式会社ディークラウド代表取締役の小川英明さん

左●交差点の角に建つ「コマエカフェ」。道をはさんだ東側には市庁舎が見え、狛江市はこの辺りを中心に半径約2kmの円にすっぽり収まるという
右●開店4周年の手づくりのメッセージボードが出迎えてくれた

という。

オープンは2015年。北欧風のインテリアや、キッチン周りのデザインを始め、1階にカウンター付きのキッチンを置き、2階には少し大きなラウンドテーブルを配するなど、店舗の構成もスタッフ全員で計画した。心がけたのはお母さんと子どもにとっての居心地の良さ、使いやすさだ。とくに2階にあるトイレは通常の約3倍と十分な余裕をとり、オムツ替えのベッドも用意した。階段もコーナーを巡る緩やかな階段に改修し、その下のスペースは靴を脱いで上がる小上がりを設えた。一畳くらいのこのスペースには適度な閉鎖感があり、母と子が並んで、周囲に気兼ねなく食事するにはうってつけだ。

「子育て中のお母さんは人生でいちばん忙しく、子どもにもいちばん気を使わなければならない時期です。そのお母さんにとって居心地がいい、使いやすいということは、すべてのお客さんにとって良いことだと考えています」。小川さんのこうした細やかな心配りが功を奏し、連日子ども連れの若いお母さんで賑わう店となっている。

上●産直野菜を小売する「コマエカフェファーム」
右●カウンターが付いた明るい北欧風のキッチン

カフェに不動産業を組み込む、という発想

しかし一見したところ、ここが不動産会社である印象はどこにもない。不動産会社といえば必ず窓一面に貼り出されている物件案内も見当たらないし、看板も掲げられていない。あえて言えば、階段のマガジンラックにコマエカフェ発行の『不動産ガイドブック』などの関連冊子が置かれ、2階には壁に掲げられた宅地建物取引業の免許証と、「OFFICE」と書かれた小部屋があるばかりだ。

「不動産会社にカフェを併設するのではなく、いかにカフェに不動産業機能を組み込むかが、僕たちの挑戦となりました。ですからカフェであることを邪魔することは一切やらないと決めました」と小川さん。不動産業の認可を得ているのはこの2階のスペースだが、「このオフィスも、トイレを大きくとったためにすごく狭くなってしまいました」と笑う。それでも最近では雑誌で紹介されたり、ホームページを通じて知られてきたせいか、不動産関連の相談をされることも増えてきたという。

留守がちな小川さんに替わって一次接客にあたるのはカフェのスタッフだ。連絡を受け、可能であれば小川さんが戻って対応するが、まずは「お客様カード」に記入してもらう。お客さんは、カフェでコーヒーを飲みながら相談することもできるし、人に聞かれたくない内容や正式の契約の時は、別に用意されたオフィスに移ることもできる。

こうしたカフェに不動産業を組み込むという業態は、「コマエカフェ不動産」の試みが、おそらく全国でも初めてのケースだろう。最初はなかなか認可が下りず、一時はこの業態を諦めかけたこともあったという。それでも実現できたのは、町の不動産会社の印象を変えたいという、小川さんの強い思いがあったからだ。

「この町に住むための最初のアクセス先であるはずなのに、不動産会社の敷居って、高いですよね。かなり明確に目的を決めていないと、入りづらい。でもここなら、まずコーヒーを飲みにきてくれればいい。なんとなく狛江あたりに住んでみてもいいな、と、そのくらいの気分でふらりと訪れてもらうことができる。そういう不動産会社にしたかった」。

普通の不動産会社では、「なんとなく」程度ではお客さんとして認めてもらえない。しかし「コマエカフェ不動産」なら、カフェに来てくれればそれだけでもうお客さんの資格がある。今もお客さんの9割以上はカフェの客で、不動産関連は1割にも満たない。しかし、とりあえずカフェの客として1年でも2年でも「なんとなく」で話をしていて、いよいよ本気で物件を探そうとなったら、本格的に相談してくれればいい。お客さんの方も、普段通い慣れたこのお店なら、安心して話ができるというわけだ。

上●大きく窓が取られ、明るい2階スペース。壁面にはスクーンも備えられ、さまざまなワークショップや会合に使われている
右●コマエカフェ不動産発行の『不動産ガイドブック』

上●1階の窓側には三つのテーブルが並び、階段下を利用して小上がりがつくられている。写真のように、不動産関連の相談も可能だ
下●2階のトイレは子育て中のお母さんのために、ゆったりとしたスペースがとられている

「住」と「食」で町と人をつなぐ

「町なか」にあるお店には、その町の情報がたくさん集まってくる。あの空き地にはどんな建物が建つのか、誰かが家を探している、あるいは売りたがっているなどなど……。店に立ってお客さんと会話するなかで、小川さんの耳にもそうした生で新鮮な情報が飛び込んでくる。住みやすく人気のある町だから、市内で住み替えを考えるケースも多いという。その意味で町なかのカフェは、不動産業にとっても格好の情報集積基地だ。

そしてこれは小川さんの個人的なこだわりなのだが、カフェで提供するコーヒーは有名店と共同開発し、スイーツの後に楽しめるようにとテイスティングを重ねたオリジナルのブレンドだ。また季節ごとにメニューを変える食事には、地元の有機野菜を中心に、小川さんが全国から厳選した産直の野菜を使う。というのも、小川さんは東京農業大学の卒業生で、在学中からバイオテクノロジーによる野菜づくりに携わり、起業した経験がある「野菜のプロ」でもあるからだ。素材選びでは直接生産地に出向き、生産者に飛び込みで交渉して、小川さんの目にかなうものだけを集めてくる。あるいは大学時代のネットワークを利用して、良い野菜が優先して届く。そうした野菜をふんだんに使って、まだ暑さの残るこの日のランチにはハワイ風、秋には体を温めるドリアや焼きカレーと、季節ごとのメニューを用意する。

コマエカフェの店頭では、そうしたネットワークで集まった野菜も販売されている。不動産会社としての「住環境」と、野菜のプロとしての「食環境」、人生の重要な二つの要素をもつ「コマエカフェ／コマエカフェ不動産」は、なるほど、日常の暮らしにとっては頼り甲斐のあるお店だ。こうしたネットワークがさらに広がって、今では市やお母さんたちの市民グループを中心に、編み物教室や子ども向けの作文教室など、さまざまな催しの会場として使われることも増えているという。また最近の狛江で活発化してきた若者たちによるイベントの打ち合わせ場所としても、しばしば利用されようになってきた。

「多摩川でのバーベキューが禁止されたことで、その道すがらで食材が購入されていた和泉多摩川の駅前商店街の元気がなくなり、街の様子も変わりました。一方、狛江駅には準急が停まるようになって、途端に全国チェーンの食材店や100円均一ショップが出店しています。そんなふうに町は相互に関係しあいながら常に変化しています」と小川さん。目まぐるしく変わり続ける都心に近いこの町で、人と町をつなぎながら、「ここに住みたい」と選ばれる町にしていくこと。それが、ここ狛江で小川さんが「コマエカフェ／コマエ不動産」を続ける理由だ。

左上●駅の目の前にある緑豊かな泉竜寺の敷地は、さまざまなイベントにも活用されている
左下●駅の南口には、ほのぼのとした商店街の面影が今も残る
上●狛江駅北口。右手の藪は、駅前に広大な敷地をもつ泉竜寺の境内へとつながっている

ルポ

カフェから始まる まちづくり

東京・国分寺

東京都国分寺市。歴史と自然、そして都市の利便性が程よく混在するこの町には、なぜか、人と人、人と町をつなぐ個性的な「カフェ」が多い。コミュニティカフェの先駆け的存在「カフェスロー」、史跡と湧水群エリアにある「おたカフェ」、西国分寺駅前の「クルミドコーヒー」はその代表格だ。では、そんなカフェの存在は、国分寺という町の個性や魅力づくりにも関係しているのだろうか。あるいは国分寺だからこそ、魅力的でユニークなカフェが成立するのだろうか。それら、国分寺のカフェを訪ね、「カフェ」と「町」との関係性を探る。

取材・文：**斎藤夕子** photo：**坂本政十賜**

カフェ発、地域のお祭り「ぶんぶんウォーク」

東京都国分寺市。面積11.46㎢、人口およそ12万5000人（令和元年11月現在）の多摩地域にある町だ。その名が示すとおり、741年、聖武天皇により国分寺が置かれた土地で、市内には往時を伝える史跡が残る。また史跡周辺には、国分寺崖線下の「真姿の池湧水群」があり、湧水が形成する細流に沿った散策路「お鷹の道」一帯は、環境省選定名水百選にも選ばれる豊かな自然を有している。その一方、市内には、JR中央線・武蔵野線、西武国分寺線・多摩湖線が乗り入れ、JR国分寺駅には中央線の特別快速が停まるなど、交通利便性も高い。現在は国分寺駅北口で再開発が進み、2018年には駅に直結した商業施設及び高層マンションが竣工。この他にも、国分寺駅北口から西国分寺エリアにかけて、大規模マンションの新築件数も多く、市内の人口は、子育て世帯を中心に年々増加傾向にある。

そんな国分寺市で、2019年11月16・17日、「国分寺ぶんぶんウォーク2019」が開催された。2011年のスタートから9回目を数える町歩きイベントで、この2日間、国分寺駅から西国分寺駅周辺とその南側のエリアでは、大小100を超えるさまざまなイベントが開催される。町歩きイベントとはいえ、とくにルートが設定されているわけではなく、訪れる人々は自由に町を歩き回り、各種イベントやワークショップに参加したり、カフェやレストランで食事をしたり、ギャラリーに立ち寄ったりしながら、国分寺の魅力を再発見するという趣向だ。

今や、国分寺市の秋祭りとして定着した感のあるぶんぶんウォークだが、主催は「ぶんぶんウォーク実行委員会」で、国分寺市は共催となっている。つまり、ぶんぶんウォークは完全に市民発、それも、カフェ発のイベントなのだ。

「カフェスロー」
東京都国分寺市東元町2-20-10（https://cafeslow.com）
営業時間：1100～17:00（火～金）、11:00～18:00（土日祝。土曜日のイベント開催時は15:00閉店）、月曜日定休（祝日の場合は火曜日に振り替え）

地域から世界を変える「カフェスロー」

きっかけをつくったのは、「カフェスロー」代表・吉岡淳さんだ。カフェスローは2001年4月、それまで約30年にわたりユネスコNGO活動を行ってきた吉岡さんが、「もっと地に足のついた形で、エコでスローなライフスタイルを発信したい」と、当時、自身の暮らしていた府中市にオープン。だがその後、府中の店舗は貸主都合で退去せざるを得ず、2008年6月、国分寺駅南口から徒歩約5分、国分寺街道沿いの現在の場所に移転する。吉岡さんは、「ここに移転してきて、カフェスローの活動は一段階進んだと思います」と語る。

上●カフェの入り口には地場野菜などを扱うコーナーも
右●ストローベイル（藁を漆喰で固めたブロック）を内装に用いた店内には、ナチュラルな雰囲気が漂う。また店内で使用しているテーブルや椅子はすべてリサイクル品だ

「じつは、府中にいた時には地域とのつながりはほとんどありませんでした。それが、この場所に移転してきたら、まず商店会の方々から大歓迎を受けた。それには本当に感激しました。私は以前から〈地域の暮らしを変えることによって、初めて世界が変わる〉と考えてきましたが、それを具体的に実践できるようになったのは国分寺に来てからです」

国分寺に移転してきたカフェスローでは、府中時代からそうであったように、ブラジルやエクアドルの生産者と提携した無農薬有機栽培コーヒーと、オーガニックな食事の提供を中心に、エコでスローなライフスタイルを実践するための情報発信、フェアトレードによる食品や雑貨類の販売、キャンドルを灯しただけの空間でバイオリン演奏を楽しむ「暗闇カフェ」などの各種イベントを開催してきた。敷地も広くなったことから、ギャラリースペースや中庭をつくることもでき、活動の幅も広がった。そのなかで、自然と国分寺市内でさまざまな活動をする人々とも出会うようになる。ワークショップ形式で国分寺の情報を集めた「ぶらぶらマップ」なる町歩き地図の作成を行っていた市民有志グループ「国分寺モリタテ会」を主宰する保坂和雄さんもその一人だ。建築家であり、市内でギャラリーウノヴィックを運営する保坂さんとの親交を得た吉岡さんは、国分寺市内のギャラリーを巡り、町歩きを楽しもうという「ギャラリーウォーク」を企画。さらにそれぞれが知り合いに声をかけ、国分寺市からも共催を得る形で実現したのが2011年9月に開催された第1回目の「ぶんぶんウォーク」だ。

●カフェスロー及びカフェローカル代表の吉岡淳さん

公式サイト（http://bunbunwalk.com）に掲出されている第1回目のパンフレットを見ると、イベント総数こそ今より少ないが、会期は8日間に及び、ギャラリーウォークに加え、「地域野菜deグルメ」と題したイベントに

16店のカフェやレストランが参加し、会期中に国分寺の野菜を使った期間限定メニューを提供するという食べ歩き企画も行っている。さらに会期中の三連休には市内を馬車で巡ることができるなど、かなりの充実ぶりである。そして何より特徴的なのは、各イベントの拠点となっているギャラリー、カフェ、レストランなどの店舗それぞれが、国分寺ならではの個性的な店であることだ。そんな店舗の参加が、回を重ねるごとに増えている。

「府中にいた頃から、国分寺に暮らしているお客さんが多かったのですが、私の実感として、国分寺には〈この町が好きだ〉と感じている人が、本当に多い」と吉岡さん。そしてこのことが、「ぶんぶんウォーク」を成立させるベースになっているとも語る。

「国分寺には、さかのぼれば奈良時代からの歴史があり、武蔵野の自然も残っている。農地も多く、地場産の新鮮な野菜を得ることもできます。一方で都市的な利便性もある。それらがちょうどバランスよく成立している町です。また、1960年代後半からの日本のヒッピー文化が存在していたことも関係していると思いますが、国分寺にはもともと喫茶店文化がありました。つまり、自分の意思や考え方を表現するための場としての店舗、カフェや喫茶店、あるいは飲み屋さんが昔から比較的多い。そのような背景がある町なので、私たちのような、スロームブメントを起こそうというカフェを応援してくれる人もたくさんいますし、〈ぶんぶんウォーク〉のようなイベントにも、面白がってすぐに参加してくれる店、そしてお客さんが多いのだと思います」

カフェスローでは2018年8月、JR国分寺駅北口再開発地区「cocobunji（ココブンジ）」の再開発ビル「cocobunji WEST」5階、国分寺市の公益フロア内に、姉妹店「カフェローカル」をオープンした。その名の通り、コンセプトは「ローカル」で、地場野菜を使ったメニューの提供や、ゲストを招いての、町を多面的に考えるトークイベントなども定期的に開催している。ぶんぶんウォークを契機とする官民の連携は、より深まりを見せているようだ。

国分寺の魅力を発信する「おたカフェ」

第1回目のぶんぶんウォークを企画する際、吉岡さんらがすぐに声をかけたのが「史跡の駅　おたカフェ」を運営する高浜洋平さんだった。「おたカフェ」があるのは、国の史跡に指定される武蔵国分寺跡の一角、「お鷹の道」散策の起点ともなる場所だ。2009年10月、隣接する国分寺市の施設「武蔵国分寺跡資料館」及び「おたかの道湧水園」と共に、それらの入場券販売と観光案内所としての機能も備えた公設民営のカフェとしてオープンした。しかし、高浜さんがこの場所でカフェのような活動を始めたのはそれよりも前。2007年から2008年末までの約2年間、ここで毎週日曜日、キッチンカーによる「おもてなし屋台」を出店していた。

「結婚して以来、国分寺市に暮らしていたのですが、サラリーマンとして会社と家を往復するだけで、町のことをあまりよく知りませんでした。ただ、もともと学生時代にはまちづくりを勉強していましたし、せめて土・日くらいは、自分の暮らしている町にかかわり、町をよくするような活動がしたいと考え始めたんです」

高浜さんが最初に目をつけたのは、再開発が進む国分寺駅北口で、開発用地として仮囲いされている仮設的な隙間だった。そこにキッチンカーを複数台持ち込み、週末だけオープンする屋台村をつくる構想を描いていた。また、ちょうどその頃、市内にある東京経済大学で開催していた〈まちづくりフォーラム〉に参加、学内の地域連携・地域貢献プロジェクトとして〈まちづくり広場　国分人〉を主宰していた経済学部教授で農学博士でもある福士正博さんとの知己を得る。

「福士先生に屋台村構想をお話ししたら興味を持ってくれて。その1カ月後には、福士先生と一緒に国分寺市役所に提案書を持って行きました。国分寺市も関心をもってくれたのですが、場所は駅前ではなく、お鷹の道のところに市有地があるから、そこでやってみたらどうか、と言われたんです」

しかし、当時はまだ、お鷹の道は遊歩道としてほとんど整備されておらず、ひと気も少ない森の中、という雰囲気だった。「こんな所に人が来るのか」と不安を抱いたという高浜さんだが、じつは、高浜さんの奥さまがスパイス料理教室の先生をしており、カフェで自分の料理を提供したいという夢をもっていた。一方、国分寺市からは地元をPRして欲しいという意向も伝えられていたことから、高浜さんご夫婦は、東京経済大学の福士ゼミの協力も得ながら、ここで、国分寺野菜を使ったスパイスカレーと飲み物を提供する屋台をスタートする。

「そうしたら案外、いろんな人が集まってきました。日常的に散歩をしている人はもちろん、市内でいろんな活動をしている人が面白がって来てくれた。カフェスローのスタッフや、西国分寺のクルミドコーヒーたちあげの方々と知り合ったのもこの時です。何か変わったことをすれば、面白い人たちが集まってくるんだなって、実感しました」と高浜さん。

そんな屋台が常設店へと変わったのは、屋台のすぐ隣、国分寺市が所有していた敷地を、武蔵国分寺跡資料館として活用することを決定したことがきっかけだ。じつは、敷地の中には空き店舗があり、これも市有地となっていた。この空き店舗をどのように活用するのか、国分寺市では市民も交えた検討会などを経て、史跡エリアに訪れる観光客の休憩所兼観光案内所としての機能をもつ「まちの駅」とすることを決定。ここにカフェを併設し、そのカフェ事業者に、資料館や庭園の入場券販売、観光案内にまつわる事業を委託することとなった。こうして誕生したのが「史跡の駅 おたカフェ」だ。

町と農をつなぐ

国分寺市では2015年から「国分寺300年野菜 こくベジ」と称し、地元野菜のPRプロジェクトをスタートしている。市内の飲食店を意識してみると、「こくベジ」と書かれた旗を掲げた飲食店があちこちに点在していることに気づく。それらの店では、国分寺野菜を使ったオリジナルメニューを提供しているのだ。じつはこのプロジェクトがスタートしたきっかけも「おたカフェ」や、ぶんぶんウォークを通じた関係メンバーの活動からだ。

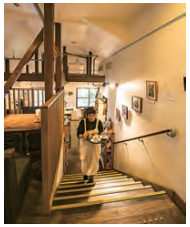
「屋台の時から、地元の野菜を使ったスパイスカレーを売りにするために、農家さんを直接訪ねて交渉し、野菜を分けてもらっていました。ただ、農家さんにしてみれば、一軒の店で使いたい野菜を売ったって、まったく商売にならない。ですが目の前に新鮮な野菜があるのに、それを使わないなんて、すごくもったいないじゃないですか」

そこで高浜さんは、一緒に地域活動をしていた奥田大介さん、南部良太さんと共に地場野菜をできるだけ多く流通できるようにするためのネットワークを飲食店側でつくり、さらに、仕入れた野菜を各店舗へ配達するという仕組みを築きあげた。国分寺市のこくベジプロジェクトをきっかけに地場野菜流通も本格化していき、当初、4軒の農家と10店の飲食店で始まったこくベジプロジェクトは、現在までに、提携農家15軒、飲食店約100店舗にまで広がっている。

「こくベジ流通を始めて4年目です

「史跡の駅 おたカフェ」
東京都国分寺市西元町1-13-6
（http://ota-cafe.com）
営業時間:9:00～17:00（4月～10月の土日祝は～19:00、7月、8月は毎日～19:00）、月曜日定休（祝日の場合は火曜日に振り替え）

●おたカフェの店内には国分寺市内の名産品や関連する書籍の販売コーナーもある



●ロフト式に2階へと続くカフェスペース。国分寺市の公設民営施設だが、「空間デザインや什器、備品などにはかなり口出しをさせていただきました」と高浜さんが言うだけあって、暖かな雰囲気のオシャレな空間になっている

左●湧水群がつくる細流に沿って続く「お鷹の道」
右●真姿の池湧水群がつくる清冽な細流は、子どもたちにとっては格好の遊び場に

●おたカフェを運営する高浜洋平さん。

が、この間に、なんとか人件費を捻出して回していけるようになりました」と高浜さん。今後はこくベジの宅配事業を自立的に回していく目処がたったという。ただし、こうした農家との連携は、単に「事業として」というよりも、お互いの信頼関係によって成立している。たとえば、高浜さんはこれまでに、売り物になりにくい野菜や果物の「レスキュー」も行ってきた。農家からそれらを引き取り、ジャムやピクルスなどの加工品として販売するのだ。しかもその量は次第に増え、おたカフェの厨房では加工しきれなくなったため、高浜さんは加工所を兼ねたカフェとして、2015年3月、国分寺駅北口にジャムやピクルスの加工場を兼ねた「めぐるみLabo & Cafe」を新たにオープンする。また、同年10月には「特定非営利活動法人めぐるまち国分寺」を設立。それまでは市の委託事業は東京経済大学を窓口として受けていたが、以降はNPOとして、より主体的に事業が展開できるようになった。

「おたカフェは、今年の10月でちょうど10周年を迎えました。屋台を始めたばかりの頃は、自分が暮らしている町といっても、知り合いはほとんどいなくて、暗いトンネルを進んでいるようでした。それが今は、周りは知り合いだらけ。そう感じられることで、とても気持ちが楽になって、視野も広がったような気がします」

ちなみに「おたカフェ」の名は、当然、お鷹の道の「鷹」にかけているが、英語表記は「Water Cafe」。湧水地群の一角にあることも表現している。そして高浜さんは、この「湧く」場所であることも気に入っている。

「ここは〈湧き出す〉場所。だいたいいつも、僕らがいろんな悪巧みを思いついて、実行に移してくれそうな人、あるいは行政に持ちかけて、なんとか実現している、という感じ。ぶんぶんウォークでさまざまな場所や人とのつながりができたことで、とても軽やかに連携できるようになりました」

「町をよくする」ために、さまざまな活動を実践する高浜さんは、今なおサラリーマンとの二足のわらじを履いている。そんなライフスタイルが実現できるのも、この町にたくさんの仲間がいるからだ。

豊かな関係性を築く「クルミドコーヒー」

JR中央線の国分寺駅と国立駅の間に位置する西国分寺駅は、中央線の中ではもっとも新しい、1973年に設置された駅だ。もともと貨物線だった武蔵野線の開通に合わせ、その乗り入れ駅として開業した。そのためか、乗降客数は1日平均3万人弱で、中央線のなかでは日野駅、高尾駅に次いで3番目に少ない（2018年度）。南口駅前には、1980年代に整備された都営団地が広がり、それはそれでモダンな佇まいをもつのだが、広々とした駅前広場と合間って、どこか無機的な雰囲気を感じなくもない。

そんな南口駅前に、周りの雰囲気とはちょっと異なる、木に囲まれたカフェがある。それが、高浜さんの話にも出てきた「クルミドコーヒー」だ。2008年10月、店主の影山和明さんは、生家のあった土地に多世代型シェアハウス「マージュ西国分寺」を建設、その1階にカフェをオープンした。

「西国分寺はカフェの経営的には向いている町とは言えません。乗降客数も少ないし、高齢世帯も多く、所得水準も決して高くはない。しかも生家とはいえ、子ども時代はともかく、大学生や社会人になりたての頃など、用事があれば吉祥寺や新宿に出る日々で、この地への愛着もとくになかった。ただ、自分の生まれた場所は地球上にここしかありませんし、いざ建て替えるとなると、そういう場所に対してのある種の責任を果たしたいといった思いが芽生えるようにはなった。そこでこの場所に、人と人が出会う交差点のような、町の縁側のような場をつくりたいと思ったんです」

そもそも影山さんは、カフェをつくるにしても、どこかテナントに入ってもらうことを考えており、自身が経営し、ましてやホールに立つようになることなど、当初は想定していなかったという。大学卒業後は外資系コンサルティング会社に勤め、その後、ベンチャーキャピタリストとして活動してきた影山さんは、とくにコーヒーにこだわりがあったわけでも、カフェや喫茶店が特別好きだったわけでもなかったからだ。ただそれまでの仕事の経験から、売上や利益だけを目的とするビジネスのやり方に違和感を覚え始めていた。そこでこれまでのセオリーとは違うようなお店づくりをやってみようと考えるようになる。利益の最大化のために、お客さんや働くスタッフを利用するようなやり方とは違うやり方を、この西国分寺で試してみようと考えたのだ。

しかし、具体的にどのようにすればいいのか、最初は頭でいろいろと考えていたが、実際にやってみないとわからないことばかりだったという。まず、カフェという場があるだけでは、人と人との交流は生じず、地域とのつながりもできなかった。そこでオープン1年後から、「クルミドの夕べ」と称する対話イベントを実施するようになる。月曜の夜に2時間、地下階のみを使用した定員15名という小さな集まりだったが、次第にそこでお客さん同士が顔見知りになり、それぞれの交流はカフェの外にも広がっていった。その後も、ミニコンサートの開催や哲学対話の会、あるいは本の出版など、カフェとしての業態にとどまらない活動を展開し、人と人、人と町の間に豊かな関係性を育てる仕掛けを講じてきた。

「西国分寺はカフェに向いている町ではありませんが、だからこそ、どうやれば経営的に成立させられるのか、お店を磨くことができるのか、その工夫を考えざるをえなかった」と影山さん。試行錯誤の中、お店としての形が整ってきたと実感できたのが2011年半ばから2012年くらいだったと振り返る。そして、「クルミドコーヒーとして地域とのつながりができたのもちょうどその頃。2012年の夏から秋です」と年次まで明言する。それはやはり、ぶんぶんウォークをきっかけとしたつながりだった。

信頼の交換が町を変えていく

「第1回目のぶんぶんウォークの時には、市内のいくつかのカフェが、武蔵国分寺公園内の広場で〈オープンカフェ〉をやるので参加しませんか、とお誘いいただき、その一つとして出店させてもらったんです。その時は、ちょっと他人事的な参加でした。それが翌年、吉岡さん、高浜さんから、ぶんぶんウォークに地域通貨を絡めたいという話があって、どういう地域通貨がいいのか、一緒に考えることになったんです。その時からです。地域の他のお店の方々や農家さん、あるいは地域福祉に取り組む方々とも交流をもつようになりました」

日本で地域通貨が注目されるようになったのは1999年5月、NHK-BSで放送された「エンデの遺言」がきっかけだ。以来2000年代初頭には、全国各地で、地域内で循環する、「円」に変わる「通貨」を使って、地域を活性化させようという活動が盛んに行われた。しかしそれらの活動はどれもあまり長続きしていない。影山さんはかねてより、地域通貨に注目し、また、それがうまくいかない理由を自分なりに分析してもいた。そのうえで、自らが、自らの地元で地域通貨に挑戦する機会を得ることとなった。そうして誕生したのが、お金であり、メッセージカードでもあるという特徴をもった国分寺の地域通貨「ぶんじ」だ。「ぶんじ」は、2012年9月に開催された第2回目のぶんぶんウォークから、市内で流通し始めている。

「ぶんじ」の仕組みについては、公式サイト（http://bunji.me）をご参照いただきたいが、この「ぶんじ」にも、影山さんがそもそもクルミドコーヒーを始めた動機、「〈テイク〉ではなく〈ギブ〉から始まる事業」という考え方が

クルミドコーヒー
東京都国分寺市泉町3-37-34マージュ西国分寺1F（https://kurumed.jp）
営業時間:10:30〜22:30、木曜日定休

●クルミドコーヒーの店内は、螺旋を描くようにスキップフロアでつながり、各層ごとの、広くはない空間が、親密感のある暖かな雰囲気をつくりだしている

●クルミドコーヒー店主の影山知明さん

反映されている。

「お客さんとのかかわり方には〈テイク〉と〈ギブ〉の二通りあると考えています。〈テイク〉はいわば、ビジネスとして普通のかかわりで、お店側は自分の事業を成立させるために商品を提供し利益を得る。お客さん側は必要なものをそれなりの金額を支払って得る。ごく当たり前のことです。ただこれは、双方が自分の利益を最大化させたい、という関係性で成立するやりとりです。言い方は悪いですが、お互いが利用し合う関係とも言える。一方、これが〈ギブ〉の場合、お店側はお客さんに喜んでもらいたいという動機で商品を提供する。カフェであれば飲食と共に空間や時間をお客さんに提供する。そんなお店側の想いをお客さんが感じて受け取ってくれれば、お客さんの方でもその受け取った分を返したいという想いが生じると思うんです。それはたとえば、お店に対して、〈美味しかった〉〈いい時間を過ごせた〉という言葉を返してくれることだったり、再度お店を訪ねてくれることだったりといった形で現れてくる。するとそこには愛情や信頼関係が生じますよね。そんな積み重ねによって、人と人とのかかわりが豊かになっていく。そして、それは次第に町にも染み出してくる。その結果として、自然といい町が育っていくんじゃないかな、と思うんです」

きれいごとにも思える考え方だが、これは影山さんがカフェの運営を通じて実践し、そして結果を出してきたことでもある。クルミドコーヒーはグルメサイト「食ベログ」のカフェ部門で、全国に数多あるカフェの中でも有数の人気を誇り（2013年度には全国1位にもなった）、現在では年間約3万5000人の集客を得ている。もちろん食ベログの指標はあくまで一面的なものだが、それでも、クルミドコーヒーが目指す「売上・利益の成長」を目的化しないカフェのあり方に対する一定の評価と捉えることはできる。また、週末ともなると、せっかく訪ねてくれたお客さんがお店に入れない事態が生じるようになり、2017年3月末には国分寺駅北口に姉妹店「胡桃堂喫茶店」をオープンした。影山さんは「たまたまご縁があって、このタイミングと場所になりました」というが、このことも、クルミドコーヒーが大切にしてきた経営の指針が、間違っていなかった証だろう。

「私自身にとっての地域とは、この西国分寺、あるいは行政区としての国分寺市ということではなく、お店のスタッフやお客さん、一緒に活動する人々など、具体的な人、顔ぶれと共に築いて来た思い出が集積したものです。もちろん、ぶんぶんウォークやぶんじを通じた関係性という意味では、国分寺、西国分寺もそうした場所に含まれますし、お店を始めた頃とは違い、愛着も育っています。今ではカフェの店主を自分の天職だと思うくらいに（笑）。ただ、出会えている人もいればそうではない人もたくさんいる。それを〈町〉と言ってしまっていいのか、ということには躊躇があります」

影山さんはそう言いながらも、ぶんぶんウォークをきっかけとして生まれた関係性に「一つの土壌」としての可能性も感じている。そしてその土壌からは、植物の種が芽を出し、幹をつくり、枝を伸ばしていくように、有機的で定型のない豊かな未来が育っていくのではないかという期待もある。

その種が育った時、国分寺という町は東京の中で、ひいては日本社会の中で、唯一無二のユニークな町として、輝くことができるに違いない。

左●1階の入り口。クルミの木でできたブロックを敷き詰めたフロアに、くるみ割り人形をモチーフにしたシンボルマークがはめ込まれている
上●地下スペース。壁一面に水出しコーヒーのサイフォンが並ぶ

インタビュー

「出会いの場」としてのカフェ

多くの「天才」たちの拠点となったパリのカフェ。
「天才がカフェに集まったのではなく、カフェが天才を育んだ」、
と指摘するのは飯田美樹氏だ。そのようなカフェは、現代でも存在するのだろうか。
あるいはそういった「場」を、新たにつくり出すことは可能だろうか。
「カフェから世界は変えられる。
カフェから時代は創られる」とする飯田氏に、話をうかがった。

飯田美樹

カフェ文化、パブリック・ライフ研究家

留学で出会ったパリのカフェ

2001年から1年間フランスに留学していたのですが、学校のあるサン＝ジェルマン・デ・プレはどんなところか調べていたら、教会などと一緒に、カフェが名所として紹介されていたのです。カフェが名所になるってどういうことだろう?と思って調べ始めたのがカフェを研究するようになったきっかけです。もともと喫茶店女子みたいなところがありまして、喫茶店は大好きでしたから、すぐにパリのカフェ巡りを始めました。

それまで環境系の活動をやっていて、以前から社会変革の場つくることに関心があったのですが、カフェがそうした社会変革の場としても機能してきたということを知り、俄然興味が湧きました。パリのカフェはおしゃれなイメージとは裏腹に、啓蒙思想やフランス革命、近代絵画の誕生から実存主義に至るまで、新しい価値を生み出す舞台であり、社会変革の発端の場でもあったのです。趣味に近いカフェと社会変革が私のなかで結びついたのですから、「これはもうやるしかない」、と研究ノートをつくってパリ中のカフェをまわるようになりました。

当時、日本では東京を中心に、カフェブームが起きていて、東京中におしゃれなカフェが雨後の筍のごとくできていた時期です。一方、フランスのカフェはみんなが思っているほどおしゃれな場所ではありませんでした。まだたばこを吸っている人も多くて、カウンターの下はたばこの吸い殻や灰だらけの店も。それでも、カフェが好きだったので留学中は、1日3回くらいは、カフェに行っていました。

留学を終えて東京に戻ってきて、最初に思ったのは、喫茶店やカフェに早く行きたい!と。『Hanako』などの雑誌に紹介されている東京のカフェの方が、パリのそれよりずっとステキに見えたからです。個性的で、おしゃれで、ケーキも美味しそうだし（笑）。

ところが、ここでまた、逆転が起こるんです。憧れていたパリのカフェよ

いいだ・みき―1980年神奈川生まれ。早稲田大学商学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了。カフェ文化、パブリック・ライフ研究家。Paris-Bistro.com日本版代表。東京大学大学院情報学環特任助教。
著書に『caféから時代は創られる』（いなほ書房、2009）＊2020年クルミド出版より再販予定

り日本のカフェの方がきれいでしたが、いざそこに腰掛けてカフェオレなどを注文すると、何かが違う。確かにきれいでおしゃれだけれど、結局のところそれだけじゃないか。カフェには、もっと大事なものがあるのでは。パリのカフェはみんなが思っているほどおしゃれな場所じゃないけれど、日本のカフェにはない何かがある。それはいったいなんだろうか。

自由さと多様性の場所

パリのカフェでは、隣の人とよく話をしました。ある時はフランス語を教えてくれたり、話が合ってそれがきっかけで仲良くなったり。そういうことがわりとよくあったんです。人と人が出会い、見知らぬ人同士でも気軽に会話が楽しめる。それがパリのカフェでは普通にあったのですが、東京に帰ってきて、カフェに入っても、人との出会いはまったく起こらない。「パリのカフェには出会いがあった」と気づき、カフェや喫茶店の違いについて考え、大学などで発表すると面白がってもらえ、カフェを本格的に研究するため大学院にも入ってしまった。

喫茶店はもとより東京カフェにしても、結局のところ店主の自己表現の場であって、お客にとってはそれがけっこう息苦しかったりする。何かやろうとしても、店主の方が上で、お客は二の次という感じ。結果、もう二度と行くものか、ということになる。東京カフェが盛り上がっていた時、男の喫茶店から女のカフェへ、などとも言われましたが、喫茶店もカフェも出会いの場ではなかったですね。

パリのカフェでは、とにかくみんなよくしゃべる。お客さん同士で、あるいはギャルソンと、常に会話が交わされている。でも、その一方で本や新聞を読みふけっている人や、何か書き物をしている人もいます。カフェのなかでは、人は思い思いの時間を過ごしています。このうえない自由さと多様性こそが、パリのカフェの最大の特徴かもしれません。日本の喫茶店やカフェに欠けていたのは、この自由さと多様性だと思いました。

サードプレイスとしてのカフェ

2000年代のパリは、けっこう哲学カフェが盛んな時期で、いろいろなところで催されていました。人気のある哲学カフェは、満席で入れないということもあって、外のテラス席まで人があふれているなんてこともしばしば。ふらっとお茶を飲みに来た人が、哲学カフェの場に入れなかった人と話をして仲良くなる……、なんていう光景を見たこともありました。

哲学カフェは、講演会などとは違い、誰でも参加できて自由に発言できる。1時間半くらいですが、みなさんトイレにもいかず、とても熱心に話をするんです。身分や立場、性別、年齢に関係なく、本当に話したいことを話す。まさにそこにあるのは、人の出会いであり会話です。その意味で言えば、哲学カフェにとって、カフェは格好の場所だと思います。家庭や職場と共に、個人の生活を支える場所として「サードプレイス」が注目されていますが、その提唱者である都市社会学者のレイ・オルデンバーグは、パリのカフェほどサードプレイスに相応しい場所は他にないと言っています。

パリのカフェには、自由さと多様性があると言いましたが、それが確保されるためには、まず何よりも人を尊厳ある人間として扱うということがすごく重要です。どんな人であっても暖かく迎え入れるからこそ、そこが来た人にとっての居場所に変化する。日本でこうしたカフェに出会うのは簡単ではありません。でも、今そういうカフェがあれば、人はどんどん来ると思いますし、みんなそういう場所を求めているはずです。（談）

●カフェ・ド・フロールで開催された哲学カフェ
（photo:飯田美樹、3点共）

左、上●サン＝ジェルマン・デ・プレの老舗
カフェ・ド・フロール

第5回

Let's Greening! 緑のまちづくり

一般財団法人第一生命財団と公益財団法人都市緑化機構が共催する「緑の環境プラン大賞」は、生活の質の向上、コミュニティの醸成などに役立つ、緑豊かな都市環境の形成を目指す緑化プランに対し、助成を行う事業だ。2018年度には「シンボル・ガーデン部門」「ポケット・ガーデン部門」の2部門に対し、国土交通大臣賞2件、緑化大賞2件、コミュニティ大賞9件に加え、特別企画として「おもてなしの庭」大賞1件が選出された。今回は、「シンボル・ガーデン部門」で国土交通大臣賞に選出された緑化プランを訪ね、整備の状況について伺った。

取材・文:**斎藤夕子** photo:**坂本政十賜**

輪島の朝市横蝶〜蝶々とあそぶ、みんなの庭をつくろう

チームおんぺこ

石川県輪島市。この町の代名詞ともいえるのがほぼ毎朝開催されている「輪島朝市」だ。通称・朝市通りと呼ばれる本町通り約360mの商店街には、近くの港で揚がった魚や収穫したばかりの野菜、輪島塗の漆器、衣類や雑貨を商う200以上の露店が並ぶ。かつては市民の日常を支える市場だったが、今では輪島観光の目玉として、多くの旅行者を集めている。訪ねたこの日も、あいにくの小雨模様にもかかわらず、朝8時の営業開始と共に旅行者が続々と集まってきた。売り手と買い手が盛んに会話を交わす通りは、とたんに活気に満ちる。

そんな朝市通りから一筋南の大町通り沿いに、2019年7月「朝市横蝶」と名付けられた公園がオープンした。整備を行ったのは「チームおんぺこ」。「おんぺこ」とは、輪島の方言でウミウシのこと。「争わず、海の中をのんびりたゆたうウミウシのようなグループでありたいと思い、この名前にしたんです」とは、チームの発起人で建築家の高木信治さん。そして「音の響きもかわいいし」と言い添えるのは代表を務める本口夏美さんだ。本口さんは東京農業大学在籍中、輪島へ調査に訪れたのをきっかけに卒業後に移住。その後こちらで結婚、子育て中で、すでに13年ほどが経つという。

「高木さんとは学生時代に知り合いましたが、移住してからは一緒に活動をするようなことはありませんでした。ところがある日突然、高木さんから電話がかかってきたんです。〈空き地を公園にしたいんだけど〉って」と本口さんは笑う。

地域の交流拠点として

「朝市横蝶」誕生のきっかけは、「空き地」所有者の山崖(やまぎし)佳昭さんが、その土地の活用について、古くから隣人として親交のあった高木さんに相談したことに始まる。山崖さんは現在東京に暮らしており、自身が輪島に所有している土地を、地域の賑わい創出、コミュニティ育成などに活用したいという想いをもっていた。

●円形広場から多目的広場へと、奥行きある空間が広がる「朝市横蝶」

●里山のような多彩で豊かな自然を再現し、さまざまな蝶が来ることを願って「横蝶」と命名

上●多目的広場。奥にある井戸を囲む。小屋をつくることを計画中
右●メンバーらがDIYで石積みをしてつくった池。水中には地域の方が提供してくれたメダカが泳ぐ

「市民発の活動として、一緒にプランを考え、行動してくれる仲間が必要だと思いました。本口さんはバイタリティのある人なので、彼女に言えばなんとかなるんじゃないか、と(笑)。すると本当に、地域で長年ボランティア活動をしてきた尾坂さん、山上さん、京都市で児童公園の運営を長年務め、最近、実家に戻ってきた谷川さんらとつながった。さらに、私の同級生で隣人の向(わかい)さんや宮野さんにも声をかけたら、快く協力してくれるという。こういうコミュニケーションで発足したのがおんぺこです」と高木さん。

もちろん、時おり帰省する山崖さんも仲間の一人だ。このように、以前からの知り合いではなかった人々が声をかけあって発足したチームの存在それ自体が、後に「朝市横蝶」と名付けられる公園が育んだ、最初の地域コミュニティである。

左●今後、ワークショップスペースとして内装を整備しようとしている既存の小屋(右)と今回の助成を活用してつくったテラス下●サルビアを訪ねてきたクロアゲハ。他にキアゲハ、アオスジアゲハなどもよく見かけるという

町なかに、里山のような豊かな緑を

約621㎡の面積をもつ「朝市横蝶」は、エントランスに配されたアーケード状のパーゴラから、円形広場、多目的広場、井戸のある庭と既存の小屋を活用したワークショップ棟へと雁行しながら続く、南北に細長い敷地だ。広場を囲み、花壇やメダカの住むビオトープが配されて、奥行きある空間を彩っている。入口のパーゴラは、今はまだ無骨なスチールパイプが目立つが、いずれ、足元に植えられたヤマブドウやアケビなどの蔓性の植物で覆われていく予定だ。敷地に彩りを添えるサルビアやアスターなどの花々の他は、基本的に、地元の在来種を中心とした里山のような庭にすることを目指している。「これまではチームのメンバーが集まっては、ずっと夢のような話ばかりしていたんです。それが今回、助成をいただいたことで、ようやく現実のものになりました」と、本口さんは笑顔で教えてくれる。

7月のオープン時には朝市横蝶の楽しみ方を広く伝えることを目的に、「野遊び」の専門家を招いてのイベントを行った。この時には親子連れや小学生などで73名の参加があったという。この他、オープン前後にも小さなイベントをいくつか開催し、地域への周知活動を行ってきたことが功を奏し、おおむね順調な滑り出しを見せているようだ。

「ただ、本来はいつでも自由に入れる公園として開放したいのですが、まだ整備中の場所があるのと、ビオトープ池がちょっと深いので、現在はメンバーの誰かが駐在できる日時にオープンする形をとっています」と本口さん。運営方法はまだ手探りだが、オープン後は関心をもってくれる人が増え、花の手入れや日常的な水やりなどを手伝ってくれるようになっているという。また、池の中のメダカも地域の人が提供してくれたものだそうだ。

「今後は、農業や漁業の方々ともつながり、ここで〈マルシェ〉を開催したい。今の朝市は観光の側面が強くなっていますが、かつての、市民の台所であり、井戸端会議の場であり、人々の交流の場であった朝市のような場を、ここで実現したいのです」と高木さん。

チームおんぺこには、まだまだ叶えたい計画や夢がたくさんある。今回、「朝市横蝶」という場ができたことで、それらの夢が、現実に近づいていることは間違いない。

●後列左から尾坂さん、山上さん、本口さん、前列左から谷川さん、宮野さん、向さん、高木さん。宮野さんはご近所さんとしてチームおんぺこの活動を手伝ってくれている

連載 第⑱回

子どもたちの「笑顔」に会いに行く

**待機児童対策として、都会ならではの対応とも言われる小規模保育事業。
一般財団法人第一生命財団による「待機児童対策・保育所等助成事業」では、
こうした小規模保育園へも助成を行い、子どもたちの保育環境の充実を支援している。
そこで今回は、「まち全体を園庭に」を掲げ、子どもを中心としたまちづくりを志す
東京の小規模保育園を訪ね、その取り組みについて伺った。**

取材・文:**斎藤夕子** photo:**坂本政十賜**

東京都文京区 ちいさいおうち小石川

「まち全体を園庭に」地域とつながる保育園

小石川植物園すぐ近くに2017年9月に開園した「ちいさいおうち小石川」。0～2歳児、定員19名の小規模保育園だ。園舎は築約30年の5階建てビルの1階。上階は住居だが、1階は、もとは印刷工場、その後は配送業者の集配所として使われていた殺風景な空間だったが、これをリノベーションして園舎を新設。内装や家具には木がふんだんに使われて、とても工場だったとは思えないほど、温かな雰囲気が満ちている。さらに、園児が腰掛けている椅子やおもちゃ箱、下駄箱などは荒川上流域に産する「西川材」を扱う木工房で製作した。保育園を運営する、一般社団法人まちのLDK代表理事の及川敬子さんは「子どもたちには、本物の木の肌触りや温もりを感じてもらいたい」と、園舎づくりのポイントを教えてくれる。

子どもたちの創造力を育む

「私たちは、地域住民有志が子どもを中心としたまちづくりを志して立ち上げた法人です。これまでボランティアで〈子育てひろば〉など、子どもたちの居場所づくりを行ってきましたが、子どもたちが毎日、安心して過ごせる保育園をつくりたいと考えてきました」と及川さん。新制度で小規模保育事業が位置づけられ、文京区での補助事業もスタートしたことから、開園にこぎつけたという。ただ開園資金はギリギリで、遊具や備品は、職員が牛乳パックや段ボールで工作した手づくりのもので賄うしかなかったそうだ。

●動物やクルマの形がくり抜かれた木に、形合わせていくパズル。子どもたちは集中して取り組んでいる

●フランス生まれの木製ブロック「KAPLA」は、すべて同じ形のシンプルな板。積み上げてビルにしたり、坂道にしてミニカーを走らせたり、工夫次第でさまざまな遊び方ができる

●磁石がついた多角形のブロックを、つないだり、積み上げたりすると、思いがけない大作も生まれる

●緑の草原に動物を並べ、「野生の王国」をつくりあげている女の子

そこで、同園が今回の助成を使って導入したのは、フランス生まれのシンプルな木製ブロック「KAPLA（カプラ）」を始め、磁石付きの積み木「マグ・フォーマー」や、組み合わせればトンネルや滑り台にもなるソフトマット「ブロック・モジュール」など、雨天や夏の猛暑日など、室内でも子どもたちが十分に遊べて、体も動かせる遊具の数々だ。

「園舎が狭いため、天候によって外にお散歩に行けないと、子どもたちのエネルギーが有り余っていたんです。今回、いろんな遊具を導入することができたので、ソフトマットを使って体を動かしたり、あるいは、集中して積み木に取り組んだり、シンプルなブロックをクルマや人、道路や家に見立ててごっこ遊びをしたりと、いろいろな遊びが展開できるようになりました。子どもたちは自分なりの工夫で創造力を発揮しています」

じつは、訪ねたこの日は雨降りで、子どもたちはお散歩に行くことができなかった。それでも子どもたちは、まさに及川さんの言葉を裏付けるかのように、知らない大人が数人で押しかけていることなど一切気に留めず、みんな集中して、それぞれのおもちゃで楽しそうに遊んでいる。

子どもたちの笑顔が、人と町をつなぐ

ただ、同園では本来、子どもたちのお散歩を通じ、地域の人々との交流を育み、「まち全体を園庭に」することを目指している。園舎の廊下に貼ってある「お散歩マップ」を見ると、小石川植物園が目と鼻の先であることに加え、直線距離で500mほどの場所には防災公園を兼ねる文京区教育の森公園もあり、周囲には恵まれた自然環境があることがわかる。さらに、お店や会社など、都会ならではの施設も多い。今回導入した「KAPLA」の東京ショールームや、保育教材・用品を取り扱うチャイルド本社も近くにあり、お散歩の途中に立ち寄ることもあるそうだ。また、園の向かいにある印刷工場の社長さんとも子どもたちは仲良しで、姿を見れば「おじちゃーん!」と手を振り、時には印刷用の紙を運ぶフォークリフトの操作を見せてもらうこともあるという。

●組み合わせによって、いろんな遊び方ができるソフトマット。0歳児のごっこ遊びの場に。1、2歳児になると、ダイナミックに体を動かして遊ぶことも

「子どもたちも地域の一員として、ここで安心して、楽しく充実した生活を送ることができる。そのことが、地域の活性化や暮らしやすさにもつながると思うんです」と及川さん。同園は、地域の町会にも所属しており、今後は行事に参加したり、逆に、子どもたちが地域の人々と一緒に行うイベントを企画するなど「まちにひらかれた保育園」としての活動を充実させていく計画もある。都会の小さな保育園の試みが「人々のつながりを生む起爆剤となれば」と語る及川さんの言葉に、期待したい。

左●ビルの1階にある「ちいさいおうち小石川」。かわいらしいロゴのついた旗と木の扉が、暖かな雰囲気を感じさせる
上●左から、一般社団法人まちのLDK代表理事の及川敬子さん、園長の米沢祥子さん、法人理事の亀山恒夫さん

噂の「駅前」探検

第5回大宮駅

今尾恵介

いまお・けいすけ●1959年横浜市生まれ。フリーライター。旅行ガイドブック、地図・旅行関係の雑誌や地図・鉄道関係の書籍の執筆を精力的に手がける。（一財）日本地図センター客員研究員、（一財）地図情報センター評議員など。著書に『地図で解明!東京の鉄道発達史』（JTBパブリッシング、2016）、『今尾恵介責任編集 地図と鉄道』（編著、洋泉社、2017）他多数。

イラストマップ：小夜小町

大宮駅は、東京と北関東、東北地方、信越地方、北陸地方を結ぶ路線の分岐点に位置する。乗り入れ路線は、東北・山形・秋田・北海道・上越・北陸の各新幹線、京浜東北線・宇都宮線・高崎線・埼京線・川越線のJR在来線、さらに東武野田線、埼玉新都市交通ニューシャトル、および上野東京ライン・湘南新宿ライン・武蔵野線（朝夕に乗り入れる）を合計すると、じつに16路線となり、全国でも常に10位以内に入る巨大ターミナル駅である。かつてより、東京以北の重要幹線の分岐駅という交通の要衝として栄えてきた大宮であるが、2007年の鉄道博物館（てっぱく）の開館が追い風となって、近年は「鉄道の町」としての認知度が高まってきているという。

その大宮駅の東西で、大規模再開発が進行中だ。ソニックシティや大宮スカイビルを皮切りに始まった西口側に少し遅れて、今、東口側の開発が始まろうとしている。注目点は、氷川神社の周辺に残る豊かな自然環境と駅前の路地空間を開発に活かそうとしていることである。自然環境はともかく、低層の木造建築が多く建つ路地空間は、これまで負の遺産とみなされてきたが、むしろそれを積極的に評価し、開発に組み込もうというわけだ。鉄道と共に栄えた大宮の新たな一歩となるのだろうか。

大宮とは大きな神社を意味する普通名詞的な地名で、山形県から福岡県まで広く分布している。『角川日本地名大辞典（DVD-ROM版）』によれば全国に31もの大宮があるらしい（大字レベル・旧地名も含む）。ただし大きいといっても相対的なもので、意外に小さな神社をそう呼ぶことも珍しくはないようだ。

このため大宮のつく駅は多い。たとえば阿波大宮駅（高徳（こうとく）線・徳島県板野町）、和泉大宮駅（南海電鉄本線・大阪府岸和田市）、越前大宮駅（越美南（えつみなん）線・福井市）、丹後大宮駅（京都丹後鉄道・京都府京丹後市）、常陸大宮駅（水郡（すいぐん）線・常陸大宮市）など混同を避けるために国名を冠したものが目立つ。京都市の大宮駅は中心市街の西部を南北に貫く大宮通にちなむ阪急の駅で、すぐ近くには京福電鉄嵐山線の起点・四条大宮駅もある。静岡県富士宮市は昭和17（1942）年に市制施行するまで富士郡大宮町で、身延線の駅名も大宮町（まち）駅と称していた。「町」を付けたのは、先に開業した埼玉県の大宮駅と区別するためである。

その埼玉県にも「大宮町」は2か所あった。北足立郡と秩父郡であるが、前者はさいたま市大宮区になった方、後者はこの地方の総鎮守である秩父神社を指す地名で、秩父郡の大宮は鎌倉時代から大宮郷と称した長い歴史がある。明治22（1889）年の町村制施行でも大宮町という自治体になったが、大正5（1916）年には郡名をとって（あるいは神社名を採用？）秩父町と改めている。改称前にすでに1万人以上の人口を擁していたが、北足立郡の大宮町（現さいたま市大宮区）との混同を避けたようだ。同3年に秩父鉄道が「秩父駅」まで開通したことが影響したとも考えられる。

さて、埼玉県北足立郡大宮町に設置された大宮駅は明治18（1885）年の開業で、全国各地に居並ぶ「大宮」関連駅の中では最も古い。それでも埼玉県で初の鉄道となる日本鉄道中仙道線（東北・高崎線の前身）が上野～熊谷間

（38マイル＝61.2Km）を開通した際の途中駅はわずかに王子、浦和、上尾、鴻巣の4か所だけで、大宮に駅はなかった。駅間距離の平均は12.2キロと長く、現在では埼玉県でダントツの乗車人数（JR東日本では8位）を誇る大宮駅のあたりも、当時の汽車は中山道旧大宮宿の甍の波を間近に見ながら素通りしていたのである。

大宮に駅が設けられた明治18年は、現在の東北本線（宇都宮線）にあたる日本鉄道奥州線が宇都宮まで開通したタイミングだ。ちなみに利根川の橋梁がまだ完成していなかったので、これが竣工する翌19年までは栗橋から中田（仮停車場）まで利根川を渡船が結んでいた。牧歌的な時代であった。

奥州線は陸奥を福島から仙台、盛岡を経て青森まで文字通り奥州を縦断する長大な路線として計画されたが、既設の中仙道線からどこで分岐するかが問題だった。荒川橋梁の北側に位置する川口、中山道の宿場である大宮、さらに北上した同じく宿場の鴻巣（こうのす）という3通りが候補となったが、川口分岐案は宇都宮まで最短距離であるが建設する距離が最も長く、鴻巣分岐案は新建設区間こそ最短で済むものの全体を見ればかなりの遠回りであることから、中をとって大宮分岐で決着している。

分岐点となったこの年に氷川神社の北側、旧境内地を割いて大宮公園が完成した。日本鉄道が明治32（1899）年の時刻表『汽車汽船旅行案内』4月号に掲載した広告「花見御案内」には沿線の桜の名所がいくつも記されているが、大宮公園については「大宮停車場より十町許（ばかり）氷川神社の境内にして地界頗（すこぶ）る広く一面に松林をなし池沼其前に横（よこたわ）り幽静閑雅林中処々に酒楼あり皆温泉浴場を設く桜樹は其間を点綴（てんてい）して頗る趣を添ゆ」と紹介している。「温泉浴場」といっても沸かし湯だろうが、近郷随一のリゾート地だったようだ。

大宮は奥州線と中仙道線の分岐する要衝となったことによって以南の交通量は増え、明治25（1892）年には上野～大宮間が複線化されている。まとまった距離の複線化としては全国的にも官営東海道鉄道の新橋～横浜間に次ぐもので、大阪～神戸間（明治29年）より早い。同27年にはそれまで上野停車場構内にあった車両修繕工場がここに移され、後に大宮工場（現大宮総合車両センター）となった。交通の要衝になれば各地方との間の原料・製品輸送には便利で、工場が集まってくるのは必然である。駅の周辺には片倉製糸を始め、大宮館製糸、山丸製糸の3つの大工場が相次いで進出、大宮町の都市化は加速されていった。

日本鉄道の中仙道線、奥州線は明治39（1906）年に施行された鉄道国有法によって同年11月1日には国有化、同42年には全国一斉の線名の命名によって東北本線（上野～青森ほか）と高崎線（大宮～高崎）に改められた。また同年には西に位置する川越の町を結ぶ路面電車である川越電気鉄道が開通する。ちなみにこの電車は最後には旧西武鉄道の大宮線として運転されていたが、昭和15（1940）年の国鉄川越線の開通と入れ替わる形で翌16年には廃止された。

昭和に入ると駅の南側に大宮操車場が設けられる。現在のさいたま新都心あたりだが、首都圏北部方面を結ぶ貨物列車の組成がここで行われるようになった。第一次世界大戦の「特需」を契機としての日本の急速な工業化を受け、大正後期からの鉄道輸送量は貨客ともにめざましく伸びていく。同時期に東京の南側には巨大な新鶴見操車場も設けられた。同4年には東武野田線の前身である総武鉄道が大宮～粕壁（かすかべ）（現春日部）間を開通、さらに交通の要衝としての地位は上がっていく。

昭和7（1932）年には大宮～赤羽間が電化され、赤羽～東京～桜木町の間を運転していた国鉄の「京浜電車」が大宮まで延伸、「東北・京浜線」と呼ばれた。この電車系統が現在の京浜東北線である。沿線の人口も増加し、隣の浦和町が昭和9年（1934）に県内では川越、熊谷、川口に次いで4番目に市制施行、大宮町も同15年に大宮市となった。

戦後は東北新幹線が昭和57（1982）年に大宮～盛岡間を開業、上野までの区間が同60年までずれ込んだため、大宮駅は在来線の「リレー号」との乗り換え客で賑わった。東京～大宮間は市街化の進んだ地域のため大幅に完成が遅れたためだが、この区間には「通勤新線」という仮称の路線を新幹線にぴったり並行して建設することになる。昭和60（1985）年に開業したこの「バイパス線」が現在の埼京線だ。この時に川越線も電化されて両線は直通するようになった。現在の大宮駅はJRが1日約26万人、東武とニューシャトルが合わせて約8万人が乗車する、今や東京以北で最大の駅である。

大宮駅東口側の路地空間 photo: **坂本政十賜**

back number

今号と関連する特集号をPick Up
（その他は特集タイトルのみ）

No.1 特集「都市の幹線道路」（1984.2）**在庫切れ**
No.2 特集「都市公園」（1984.5）**在庫切れ**
No.3 特集「都市と河川」（1984.12）
No.4 特集「子どものための都市計画」（1985.6）**在庫切れ**
No.5 特集「都市と盛り場」（1985.12）
No.6 特集「都市生活と神社仏閣」（1986.5）
No.7 特集「住宅地の道路と家並み」（1986.9）
No.8 特集「都市とヒューマンスケール」（1987.3）
No.9 特集「都市と水辺」（1987.7）**在庫切れ**
No.10 特集「都市の景観」（1987.12）**在庫切れ**
No.11 特集「都市と防火」（1988.7）**在庫切れ**
No.12 特集「都市とアメニティ」（1988.12）**在庫切れ**
No.13 特集「都市と運河」（1989.8）
No.14 特集「都市再開発とアーバンデザイン」（1989.12）
No.15 特集「アミューズメントと都市」（1990.3）
No.16 特集「高齢化社会と都市」（1990.6）**在庫切れ**
No.17 特集「私鉄と歩んだ都市」（1990.9）
No.18 特集「都市とホール」（1990.12）
No.19 特集「エコロジー都市」（1991.3）
No.20 特集「新・集合住宅論」（1991.6）
No.21 特集「新・リゾート論」（1991.9）
No.22 特集「都市と商業空間」（1991.12）
No.23 特集「都市の民俗誌」（1992.3）
No.24 特集「都市と緑化」（1992.6）
No.25 特集「公共建築のデザイン」（1992.9）
No.26 特集「都市と高層ビル」（1992.12）
No.27 特集「住宅の間取り」（1993.3）
No.28 特集「都市と広告」（1993.6）
No.29 特集「都市の上水道」（1993.9）
No.30 特集「都市の保存」（1993.12）
No.31 特集「ミュージアムと都市」（1994.3）
No.32 特集「プレハブ住宅」（1994.6）
No.33 特集「都市の色彩」（1994.9）
No.34 特集「観光都市の条件」（1994.12）
No.35 特集「都市と下水道」（1995.3）
No.36 特集「マンションのメンテナンス」（1995.6）
No.37 特集「都市と歩道空間」（1995.9）
No.38 特集「ゴミとリサイクル」（1995.12）
No.39 特集「住宅の水まわり」（1996.3）
No.40 特集「都市の駐車空間」（1996.6）
No.41 特集「橋のデザイン」（1996.9）
No.42 特集「建築と木材」（1996.12）
No.43 特集「輸入住宅」（1997.3）
No.44 特集「都市と学校」（1997.6）
No.45 特集「環境共生型まちづくり」（1997.9）
No.46 特集「都市と情報化」（1997.12）
No.47 特集「老いない住宅」（1998.3）
No.48 特集「都市と駅舎」（1998.6）
No.49 特集「住宅のコスト」（1998.9）
No.50 特集「路面電車ルネサンス」（1998.12）
No.51 特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう―集客都市へ」（1999.3）
No.52 特集「シルバー・ハウジング」（1999.6）
No.53 特集「NPOとまちづくり」（1999.9）
No.54 特集「地域のノード、公共施設の新潮流」（1999.12）
No.55 特集「都市公園の未来」（2000.3）
No.56 特集「まちづくりの新しいパラダイム」（2000.6）
No.57 特集「島のまちづくりに学ぶ｜沖縄編」（2000.9）
No.58 特集「地域に開く大学」（2000.12）
No.59 特集「危機管理のまちづくり」（2001.3）
No.60 特集「保存―都市と建築、過去と未来をつなぐもの」（2001.6）
No.61 特集「30代建築家の都市イメージ」（2001.9）
No.62 特集「使う建築、使うまち―都市のストック活用法｜国内編」（2001.12）
No.63 特集「LETS的まちづくり」（2002.3）
No.64 特集「『都心居住』のまちづくり」（2002.6）
No.65 特集「都市はアートで刺激される」（2002.9）
No.66 特集「ランドスケープ・デザインの新展開―地形を活かしたまちづくり」（2002.12）
No.67 特集「スローライフとまちづくり」（2003.3）

- 座談会｜スローライフは都市を元気にする｜陣内秀信＋辻信一＋長尾智子
- インタビュー｜地産地消、新しい自立の形
- ルポ｜ニッポン、スローライフ・シティ
- ルポ｜「スローライフ的」東京「癒し・くつろぎ・なごみ」スポット
- ルポ｜スローライフへの憧れと、グリーンツーリズムが出合う町―大分県安心院町グリーンツーリズム研究会

No.68 特集「サステナブルな都市“成長”政策―都市計画と長期ビジョン」（2003.6）
No.69 特集「吉祥寺―住みたい町ナンバー1の理由」（2003.9）
No.70 特集「緑の建物づくり」（2003.12）
No.71 特集「都市と観光、新たな視点」（2004.3）
No.72 特集「構造改革特区とまちづくり」（2004.6）
No.73 特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」（2004.9）
No.74 特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市［論］の現在」（2004.12）
No.75 特集「マルチモーダルが都市を楽しくする［ヨーロッパ編］」（2005.3）
No.76 特集「路地・横丁空間からの都市再生」（2005.6）
No.77 特集「公共空間、新たな視点」（2005.9）
No.78 特集「小さな町の豊かな暮らし」（2005.12）
No.79 特集「都市の「良質な」居住環境」（2006.3）
No.80 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❶」（2006.6）
No.81 特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」（2006.9）
No.82 特集「エリア・スタディ・シリーズ「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」（2006.12）
No.83 特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」（2007.3）**重版**
No.84 特集「サイクリング・シティの可能性」（2007.6）
No.85 特集「地図とまち―見る・歩く・つくる」（2007.9）
No.86 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❷」（2007.12）
No.87 特集「「美味し国」の景観論―フランス、都市景観の新たな創造」（2008.3）
No.88 特集「美味しいまちづくり」（2008.6）

- 鼎談｜ガストロノミーが町を魅力的にする｜松永安光＋陣内秀信＋島村菜津
- ケーススタディ｜「食」が主役の元気な町｜静岡県富士宮市―「ヤキソバの町」から「食の町」へ。市民発の活動が、町を動かす／青森県八戸市―「B級ご当地グルメ」でまちづくり／岩手県―関市―建物を活かし地産を活かす「食」のまちづくり／愛媛県今治市―畑から食卓へ。顔の見える関係が育む、美味しい「食育先進都市」
- アルバム｜「美味しい町」の風景

No.89 特集「都市を愉しむいくつかの方法」（2008.9）
No.90 特集「シュリンキング・シティ―縮小する都市の新たなイメージ」（2008.12）
No.91 特集「都市彩譜―まちのいろどりのふ」（2009.3）
No.92 特集「fun town―たのしい・かわいい・やさしいまちづくり」（2009.6）
No.93 特集「マチとムラの幸福のレシピ」（2009.9）
No.94 特集「創造のまちづくり」（2009.12）
No.95 特集「団地ルネッサンス」（2010.3）
No.96 特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」（2010.6）
No.97 特集「新しい公共交通～生活支援ネットワークへ～」（2010.9）
No.98 特集「下北沢から「都市」を考える」（2010.12）**在庫切れ**
No.99 特集「「学校」からのまちづくり」（2011.3）
No.100 特集「21世紀のまちづくり「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」」（2011.6）
No.101 特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい―再生・復興への視点」（2011.9）
No.102 特集「交流住宅―新しい暮らしのかたち」（2011.12）
No.103 特集「時間に暮らす」（2012.3）
No.104 特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」（2012.6）
No.105 特集「「町おこし」新潮流―地域に埋もれたコンテンツを発信する」（2012.9）
No.106 特集「子どもの空間とまちづくり」（2012.12）**在庫切れ**
No.107 特集「シティホール―市庁舎の新潮流」（2013.3）
No.108 特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」（2013.7）

- 視座｜隙間をどう捉えるか｜三宅理一
- インタビュー｜1.「隙間」からの都市デザイン｜吉松秀樹／2.「スキマ」が文化を生む!｜増渕敏之

- ケーススタディ｜憩い、賑わう、新しい「隙間」｜東京都新宿区「モア4番街」｜常設のオープンカフェを実現した、大都市・新宿の小さな街路空間／大阪市船場地区「太閤路地プロジェクト」｜ビルの「隙間」に息づく歴史空間／東京都台東区「2k540 AKI-OKA ARTISAN」｜ガード下に生まれたアルチザンの街／栃木県鹿沼市「ネコヤド商店街」｜小さな路地から商店街へ
- イラストコラム｜街のすきま猫ストーカー1～4｜浅生ハルミン
- 震災復興Report・5｜住民参加のまちづくり提案を通して、「街なか」に住むことの意味を探る……宮城県石巻市「コンパクトシティいしのまき・街なか創生協議会」
- 私の好きなまち・くらし・7｜Omiya on my mind―わが心の大宮 玉浦雅明

No.109 特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」（2013.11）
No.110 特集「都市とサイン」（2014.3）
No.111 特集「自由が丘―暮らしやすさの秘密を探る」（2014.7）
No.112 特集「新しいパートナーシップ―PPP＞PFI＞コンセッション方式」（2014.11）
No.113 特集「新しい図書館」（2015.3）
No.114 特集「空き家―家と暮らしと地域のこれから」（2015.7）
No.115 特集「酒とまちづくり」（2015.11）

- エリアスタディ｜酒と地域のライフデザイン｜山梨・甲州―ワインにまつわる遺産や風景を楽しみ、歩き、飲むのが勝沼流／京都・伏見―京都で生まれ育った酒米を、京都の水と技術で醸す／東京・阿佐ヶ谷―地域の「飲み屋文化」を活かした「阿佐ヶ谷飲み屋さん祭り」
- ルポ・1｜地ビールづくりはまちづくり
- ルポ・2｜京都発、全国に広がる「乾杯条例」
- エッセイ｜酒好きと酒と酒蔵と「町」または「ふるさと」｜遠藤哲夫
- スキマファイル・6｜ドンツキラビリンス向島・京島を行く
- 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・6｜城山保育園上石原／天王寺駅前おおぞら保育園

No.116 特集「ロスト近代と都市の未来」（2016.3）
No.117 特集「建築とまちづくり」（2016.7）
No.118 特集「空き地カルチャー 多孔質都市の可能性」（2016.11）
No.119 特集「〈ゲストハウス〉的まちづくり」（2017.3）
No.120 特集「ライフスタイルとしての「防災」」（2017.8）
No.121 特集「夕方からのまちづくり」（2017.12）
No.122 特集「これからの住まい・くらし―やわらかい都市へ」（2018.4）
No.123 特集「みんなでつくり、みんなでつかう」（2018.8）

- 鼎談｜「みんなの家」と公共性｜伊東豊雄×齋藤純一×小泉秀樹
- ルポ｜人と町をつなぐ「みんなの家」
- ケーススタディ｜「みんなの」新しい場所｜ヨコハマ・アパートメント／31VENTURES KOIL（柏の葉オープンイノベーション・ラボ）／グリーン大通り・南池袋公園／MAD City／まちのこども園 代々木公園
- 連載｜Let's Greening! 緑のまちづくり・1｜「もみじの庭」をお裾分けするポケット・ガーデン
- 連載｜子どもたちの笑顔に会いに行く・14｜ハピネス保育園
- 連載｜噂の「駅前」探検・1｜品川｜今尾恵介

No.124 特集「生まれ変わる街―渋谷・新宿・池袋」（2018.12）
No.125 特集「オープンスペースからのまちづくり」（2019.4）
No.126 特集「都市と木材」（2019.8）

- 連続インタビュー｜木造建築の今……素材・技術の進歩、その未来像｜1.木造中大規模建築の普及、課題と可能性｜稲山正弘／2.木造建築、多様性を支える技術｜山田憲明／3.街を森にかえるW350計画｜中嶋一郎
- ケーススタディ｜新しい木造建築｜熊本県総合防災航空センター／東急池上線・戸越銀座駅／WEEK神山
- ルポ｜1次産業から6次産業へ……林業が変わる、建築が変わる、町が変わる
- 連載｜Let's Greening! 緑のまちづくり・4｜地域の団らん「遊歩道」～フラワー・ピースフル・ロード～
- 連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く・17｜さめがわこどもセンター
- 連載｜噂の「駅前」探検・4｜大阪駅・梅田駅｜今尾恵介・小町小夜・坂本政十賜

information

待機児童対策・保育所等助成事業　第7回（2019年度）助成施設のお知らせ

この度、第7回の助成施設を決定しましたので、お知らせします。全国の開園して間もない保育園および認定こども園から、168件の応募をいただきました。厳正なる選考の結果、下表のとおり40件、助成総額3,000万円（申請額）の助成を決定しました。

地域		施設名称	購入希望品（抜粋）
都道府県	市区町村		
北海道	函館市	函館あおい認定こども園	ブランコ、鉄棒
岩手県（3）	盛岡市	うえだ保育園	和太鼓、平太鼓、バチ、はっぴ、当り鉦
	滝沢市	なでしこ保育園	締太鼓、子供用半纏
	花巻市	ひよこ保育園	すべり台、鉄棒
宮城県（5）	仙台市	紫山いちにいさん保育園	土留工事、配管調整工事等
		泉すぎのこ保育園	鉄棒、平均台、カラーマット
	登米市	白鳥水の里こども園	絵本、ソファー、ベンチ、テーブル
	遠田郡	涌谷修紅幼稚舎	SL機関車型野外用遊具
	亘理郡	国立病院機構宮城病院 事業所内保育所　つくし保育園	山桜植え込み、ガーデンベンチ
福島県（3）	福島市	ひまわり子どもの家	コラボステージ
	いわき市	松の実こども園	大中小太鼓、シンバル、キーボード、リラグロッケン等
	岩瀬郡	鏡石保育所	大型本棚、絵本スタンド、絵本棚、絵本、 キッズソファーセット
群馬県	前橋市	小さい森の保育園	各種マット
埼玉県	富士見市	Kid's Gardenきらり保育園	雲梯
千葉県（2）	千葉市	ぽかぽか保育園おてんとさん	すべり台、ウッドマウンテン
		レイモンド汐見丘保育園	巧技台、マット、サッカーゴール、隠れあなぐら等
東京都（6）	足立区	ナーサリースクールいずみ大谷田	電子ピアノ
	大田区	こどもヶ丘保育園武蔵新田園	巧技台、各種マット等
	北区	としま　みつばち保育園	鉄棒、平均台
	文京区	キューピールーム新大塚園	バスタオル、ベビーローブ、フェイスタオル等
	西東京市	生活クラブ保育園ぽむ	砂場、散歩車、ストレッチマット、畳、ベビーベンチ等
	東村山市	天王森保育園	巧技台、カラーマット、ジャンプ＆スプリングマット等
神奈川県（2）	川崎市	つめくさ保育園	砂場、パーゴラ、園庭植栽、絵本
	鎌倉市	佐助保育園	雲梯、テント、ベイビードラゴン、リスコ
静岡県	浜松市	イーエーエスはんだやま保育園	ハイハイランド、カプラ、楽器、紙芝居等
愛知県（2）	豊橋市	希望が丘第二こども園	絵本
	豊田市	下林ひまわり保育園	ままごとグッズ、レールあそび、絵本等
大阪府（2）	大阪市	あけぼのほりえこども園	ままごと用ちゃぶ台、玩具棚、ままごと台、鉄棒、図鑑・絵本
	堺市	なるなる保育園	やわらかいだん、ステップ、平均台、マット、スロープ等
岡山県	倉敷市	みちる小規模保育園	身長計、体重計、トンネル、とびとびバランス等
香川県	高松市	保育の家みいろ	高麗芝、シラカシ
愛媛県	松山市	松山しののめ学園附属保育園	四輪車、ガーデンワゴン、ままごとセット、紙芝居等
福岡県	大野城市	なないろ保育園	ストロングブロック、滑り台、着せ替えだっこ人形等
長崎県	大村市	千木の森やまびこ保育園	砂場、ベンチ、テーブル等
熊本県	菊池郡	光の森武蔵ヶ丘保育園	鉄棒、吊り輪、平均台、カラーマット
大分県	大分市	キッドワールドセカンド保育園	エアークライミング、平均台、バランスストーン、鉄棒等
鹿児島県（2）	鹿児島市	つぼみ保育園	パーテーション、収納棚、ベンチ、ピアノ、パズル等
		むぎっこ保育園	巧技台
沖縄県（2）	沖縄市	かなで保育園	コンパクト沐浴ユニット
	豊見城市	ふたば保育園	遮光ネット、砂場、プール用滑り台、プランター等

計　40施設　助成申請額3,000万円

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「緑の環境プラン大賞」に取り組んでいます。

●ホームページ　http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/

購読のご案内
年3回（4月・8月・12月）発行、頒価500円＋送料実費
定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容（PDF）をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧になり、ご希望の号をお求め願います。

city&life no.127 Dec.- Mar. 2019 - 2020
2019年12月発行

企画委員　日端康雄（慶應義塾大学名誉教授）
陣内秀信（法政大学特任教授）
大村謙二郎（筑波大学名誉教授）
小泉秀樹（東京大学教授）
木下庸子（工学院大学教授・設計組織ADH代表）
小野文夫（当財団常務理事）
佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）

編集・発行　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社アルシーヴ社
斎藤夕子

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社エイチケイグラフィックス
頒価500円＋送料実費

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life no.127 Dec.-Mar. 2019-2020